戰事畫報特派員

小杉未醒著作

陣中詩篇

〔附錄〕朝鮮日記

著者は丹青の人にして又詩人なり、滿韓の野、風雲暗膽として、干戈未だ見へざるの時、既に韓國に在り、兵馬腔倒の間、戰地より送る所の畫報は、吾人をして翹足に堪へざらしむ、而も氏が天來の詩腦は、益々豊富に、其間に得たる名吟數十篇、加ふるに「朝鮮日記」と題する散文と、著者の風韻ある畫を挿入して一卷となす、江湖の才人は必ず此好個の寄書に接するを爭はれんか。

東京　嵩山房發行

小杉未醒著作

陣中詩篇

全

最近出版書目

文學士堀田璋左右君著

受驗參考 日本歷史

全一冊　賣價金三十五錢

美術學校教授岩村透君著

西洋美術史要

伊太利繪畫ノ部　定價金八十錢

人類學會有功員八木柴三郎君著

普通人類學

全一冊　印刷中

木村小舟君校補

近世祝辭弔祭文例

全一冊　印刷中

戰事畫報特派員

小杉未醒著作

陣中詩篇

〔附錄〕朝鮮日記

著者は丹青の人にして又詩人なり、滿韓の野、風雲暗膽として、干戈未だ見へざるの時、既に韓國に在り、兵馬腔間の間、戰地より送る所の畫報は、吾人をして翹足に堪へざらしむ、而も氏が天來の詩腦は、益々豐富に、其間に得たる名吟數十篇、加ふるに「朝鮮日記」と題する散文と、著者の風韻ある畫を挿入して一卷となす、江湖の才人は必ず此好個の奇書に接するを爭はれんか。

東京　蓄山房發行

小杉未醒著作　陣中詩篇　全

最近出版書目

文學士堀田璋左右君著

受驗參考　日本歷史　全一冊　賣價金三十五錢

美術學校教授岩村透君著

西洋美術史要　伊太利繪畫ノ部　定價金八十錢

人類學會有功員八木柴三郎君著

普通人類學　全一冊　印刷中

木村小舟君校補

近世祝辭弔祭文例　全一冊　印刷中

運動會

校本醒俗

小杉未醒著作

陣中詩篇　全

〔附〕朝鮮日記

序

日露戰爭ありてより、畫筆一管、一たび軍に朝鮮に從ひ、再たび軍に滿洲に從ふ、この間實に九閲月、畫帖の端にかい記したる惡詩若干十が一を撰して先づ朝鮮の部を公にす。

明治三十七年十月

田端の寓居に於て　著者

鳴呼の虜捕傷負

猶後

○陣中詩篇目次

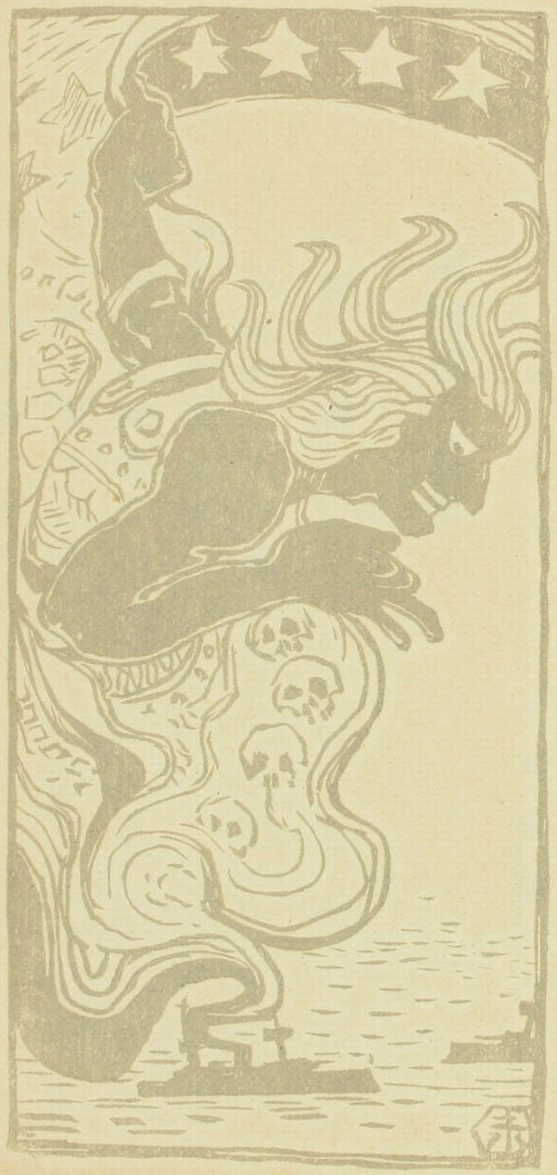
△仁川海戰の前夜……一
戰の神　千代田艦　笛聲
△二十四人……一四
△韓山夜營……二二
△姿　繪……二三
△寢覺め……二四
△漢江暮雪……二六
△舞　扇……二七
△碧蹄曉發……三一
△開城の宿……三七
△觀月亭懷古之賦……三八
△夕の思……四〇

△歸れ弟……四三
△鼎嶺の書に酬ふ……四六
△破瓢の書に酬ふ……五〇
△仁川港に大村琴花を送る……五一
△閔妃陵……五三
△むかしのこひ人へ……五五
△病兵……五六
△韓之老臣に代つて舊王城に懷古之情を賦す……五八
△野調……六四
△髑髏塔の筆者……六五
△病軍馬を悲しむの歌……七六
△配天に寄す……七九
△長髪贅……八二
△月と病兵……八四
△朝鮮を去るの歌……八七

附錄

朝鮮日記

日記の一
涙花の船出……一
涙の上……五
南韓航路……一〇
日記の二
從軍平壤行……一七
日記の三
平壤記……五三
平壤を追はるゝの記……六四



目次終

陣中詩篇

仁川海戰の前夜

小杉未醒

上　戰の神

寂かなるかな夜の海
御空に星も瞬けば
藻草の床に鱗介も
夢安らかに眠るべき
眞闇の波を漕いで行く

小舟の底に何物ぞ
さゝやく聲の聞ゆるよ
『あゝ大殺の日は近きぬ
重ね重ねの怨恨に耐へぬ
仇と舷相對ひては
平和の笑みを誰が含むべき
見よ早己に雲の間より
俯して望みて打點頭きて
破壞を喜び死の香を嗜む
戰の神は降りませるを
そが幾度か血汐に染めし

から紅の鎧の上に
漆より濃き長裳を垂れて
袖に秘印の指折り玄つゝ
一刻一宮星一々に
算ドて消して消して算じて
二十四刻の機のめぐる時
黑鐵の脚、海原を蹴り
雷の聲、天雲を裂き
大凶日の呪文を誦しつゝ
小さき魂いくばく碎かむ
海魔の膳に肉贈るべく』

さらば暴風の荒るゝ前
しばしが程の沈静さか
腥氣水より冷かに
水、鉛より重くして
我船などや疾く行かぬ
あゝ物凄き夜の海よ

中千代田艦

艦の音低く忍ばせて
舵を南に沖一里
浮べる城の千代田艦

攀づる鉄梯冷かに
仰ぎてのぞむ檣や
七星高き輝きの
落ちてかすかに映る影
夜衛の兵が肩の上
刃の色ぞほの白き
そのつはものが立并び
兎をねらふ鷹の如
暗をとほして睨めつむる
幾双の目よ皆北に、」
只今洞に現はれて

鹿を窺ふ玄鱗の
大蛇に似たる大砲の
いく門の口皆北に、」
見よ悉く北に向く
波いくばくも遠からず
闇に流るゝ燈火は
それよ恰も矢頃なれ
露艦コレーツ、ワリヤーク、」
甲板を降りいと長き
廊を過ぐればこゝ彼處
布の黄なるを束ねしは

明日の戰に屍を
かりに裏まむ料ぞとよ
そを下敷きに高いびき
さながら稚兒のあたゝかき
母の添乳に眠る如
怡安の頰のほゝ笑みは
非番の兵か膽太や
今宵の夢が永き世の
もしか覺めざる夢たらば
この微笑みも亦永く
色も變らずありぬべし

それ勇ましき武夫を
勝利の神は戀ひ給ひ
それ死に怯ぢぬ兵士は
冥府の使に憚からる
小さき國の小さき民
東のはてに義を呼んで
見よ天爲に開きたり
明日の譽れは君が手に

下笛聲

燈火明し士官室

陸の客人よくこその
高談今し興に入る
黄金泡吹く酒の味
身は敵前にありとしも
覺えぬさまの人々や
素より思ひ切りたれば
明日の運命は明日にあり
今宵の宴を扶けむに
笛の少尉よいざいざと
望まれて笑む末の坐の
人若かりき清かりき

關山月と銘彫りし
明笛二尺紅の
總ながと膝に曳き
吹き出す音よ何の曲
先づ黑髪の亂れ亂れて
亂れて末はふるふ細音の
悲調は鴛鴦の別れを嘆く
閨怨結んで閉ざす『紗窓』か
雲簇々と朝岫を出で
旌旗連る平沙の營に
萬馬肅々三軍振ふ

奇計すゝどき『將軍令』か
ひくゝ沈みて人の想ひの
心の琴の絃に觸れては
一揚高く天に參じて
十方無礙の享樂受福
誘はれ行く想よ魂よ
『月宮殿』の曲の半ばを
頰のほてりに船窓推せば
あら出でたりや東の方の
潮を分けて月出でたりや
波三千里銀を溶かして

直晝とばかり月出でたりや
あゝ靜かなる夜の海
あゝさやかなる月の影
こゝに和樂の笛の音を
など悲しうも聞きなして
何に催す涙ぞや
あゝ靜かなる夜の海。
明日万雷の轟いて
波を劈く鉄丸に
否運の旗の折るゝ時
そもや誰が兒の墓たらむ

あゝさやかなる月の影
明日叫喚の聲消えて
世に沒き人と露はぢも
知らぬ故園の窓越しに
誰が黑髪の影作る
戰の神は大殺の
劍叩きて空にあり
水の底には肉を招ぶ
海魔笑つて牙を磨す
物凄き夜を笛の聲
月の光りに混じつゝ

波の表に漂ふて
曲漸くに終りたり
星は次第に消ゑ行きて
月は高くもなるまゝに
時の歩みよめぐる空
海渺々の彼方にぞ
近づきぬらし恐ろしの明日」

二十四人

〔仁川赤十字假病院を訪ふて作る〕

燈火細り小夜は深けたり
物寂かにも小暗き室の
壁の黒きに喪の色沈み
薄き油煙に死の魔や遊ぶ
二十四脚は只白々と
覆ひの下に傷ける身の
荒木作りの寢臺の夢よ
北、古里の空にや通ふ」
二月九日君等の上に
いかなる神の咀ひやありし
便り斷たれてよるべも無きに

見す見す陸地に敵を揚げたり
二艘の艦の碇を捲いて
影も寂びしく南に出づれば
あゝ島影に朝日の旗や
見よ巨艦の雁と連る
素破と持場に奔るも遅し
左舷潮の高さ十丈
島をはさみてはためく砲よ
満艦のもの皆鳴り震ふ
海にも空にも黄なる煙の
中をくゞれば檣折れて

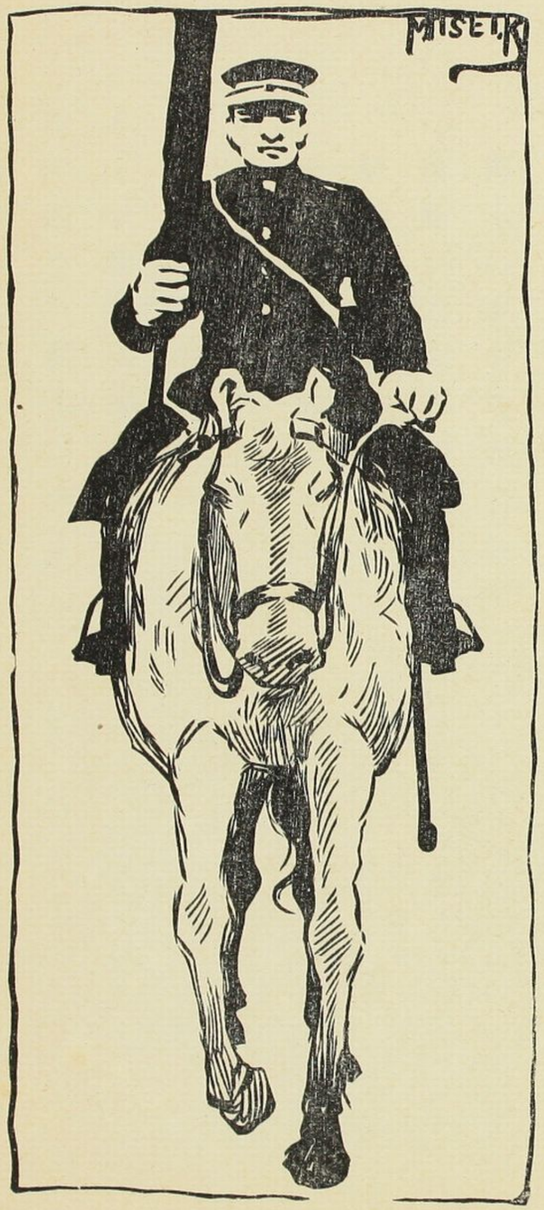
あなや眉焼く紅蓮の焔
怒れる浪に血の色流る
陸を望めば四千の劍
待ちぬ、來れと招くを奈何に
いざ敗軍の怨みはさなり
燃ゆるがまゝに水底深く
沈めし船を見捨てゝ生きし
君等にさはれ誚りはあらじ」
大和男の猛きに破れて
骨も裂かれし重傷をあはれ
大和女の手につゝまるゝ

二十四人の夢はたいかに
泣いて留めし妻子のそれか
涙かくして送りし親か
別れの酒に唱へし友か
幼な馴染みの小山か川か
知らずば門に倚りても待たむ
知らば聞きなばそもいかばかり
思ひ千里の遠きに飛べど
命二日の近きを保たじ」
風が開きて小窓に立ち
伏して望めば雪よりつゞく

仁川灣の汐今引いて
影ものすごき月のあかりに
海魔か黒きもろ手を揚げて
人を招くに似たるはそれよ
浮いたる城と海を壓せし
二艘の艦のはかなきかたみ
雲に驕りの鷲の大旗
嚴めしかりし檣ならずや
あゝ大國の大を恃みて
空しく人を害ふ罪よ
かつて平和を天下に呼びし

神の權もつ帝よいかに
さなり東の戰好みの
島人も聞け主なき土を
相爭ふて罪なき民の
いたましの犧牲幾何捨つる」
風や入りけむ燈火消えて
窓を閉せば月も洩らぬに
あやめも分かぬ暗に漂ふ
藥の匂ひ血汐の香
こは生きながら墓の裡かと
骨に染み入る夜の寂けさよ

耐へぬ痛みに眠りや覺めし
碎くるばかり牙咬む音の
しばしは歇みて又きれぎれに
細き鋭き呻きの聲よ
肌寒きに忍び足して
退かむとすれば背後の方を
いかなる事に興ずる夢ぞ
しはがれ聲の追ひ來と覺えて
壁にひゝきし笑ひは消えぬ



韓山夜營

雪はふるふる篝は消ゆる
波路陸路のつかれ
銃を枕に眠り
襟の寒きに覺めぬ
古郷の人の夢
情わるさゞやき
尚殘る耳に憂しや
繋げる馬のまぐさはむ音

姿繪

馬上の姿そのまゝに
繪師にたのみて寫させて
船の便りに古里へ
一封の書に捲き添へし

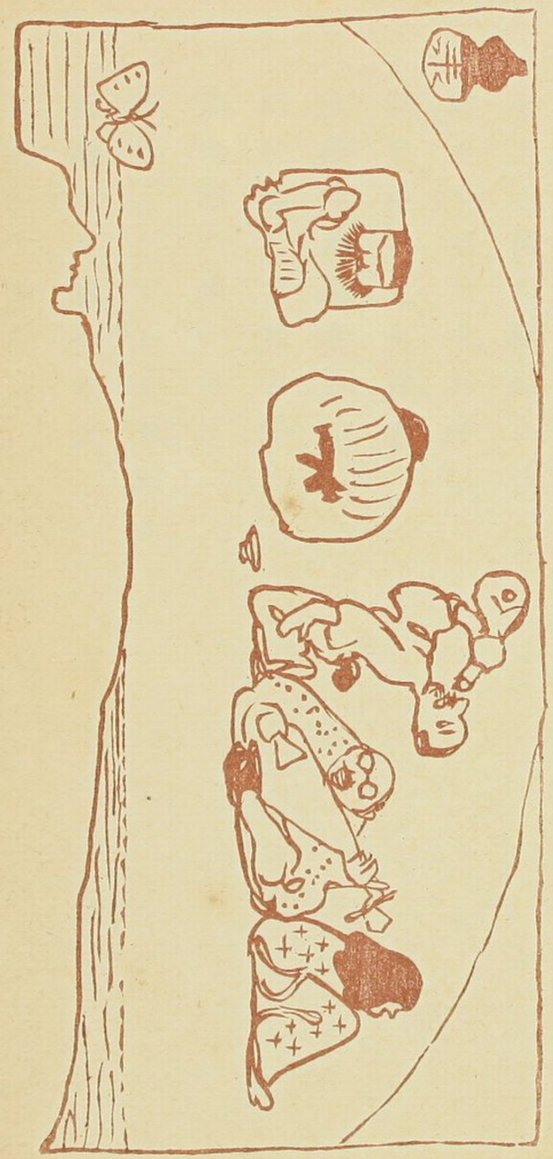
あゝ姿繪の波の上
南に向ふ朝また暮よ
ぬしは旗守り鞍の上
北に進まむ風また雨よ
鏡の蓋に忍ばせて

かくす涙のかげ膳を
荒野の夜の夢にやうくらむ

寢ざめ

〔漢城のたび寢に故山の諸友を想ふ〕

破瓢が彈ず琵琶の音の
藍染め川の瀨に響き
肩に流るゝ長髪の
二劍が歌ぞ巧みなる
苦吟に痩せし配天が
筆を運ぶは何の詩ぞ

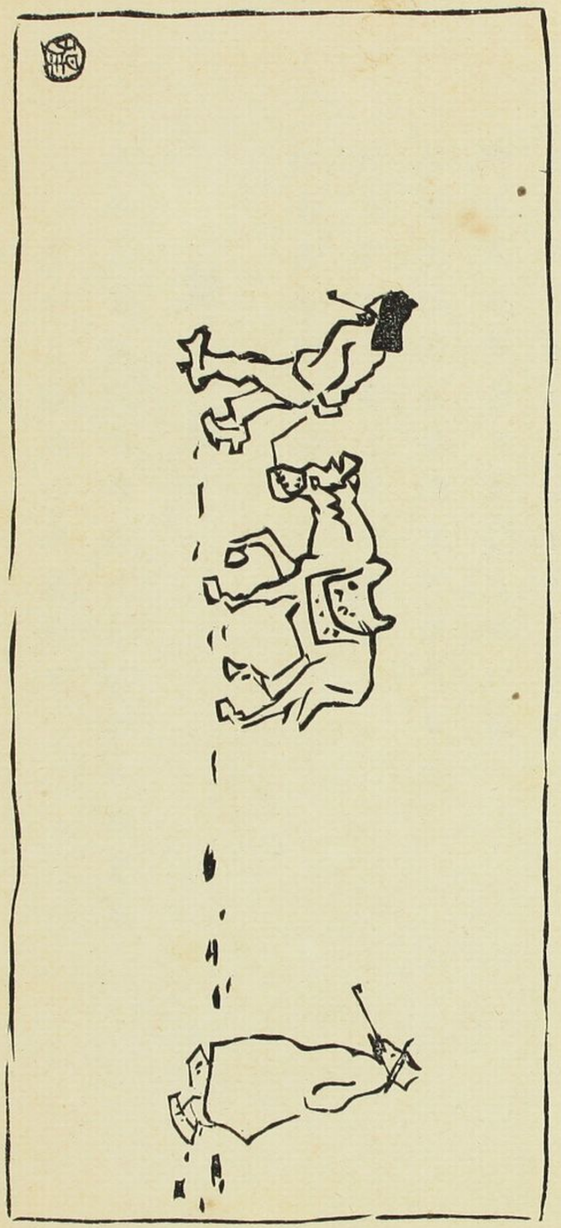


薄手盃手に受けて
花枝寒獨りもの云はぬ
そよ小男の聲高に
崩るゝばかり打笑ひ
眼を白々と打仰ぎ
亂醉の興瀧呑みの
田軒喝して脊を叩き
韓山酒の味いかに
答へんとするに魂歸り
枕滑りて夢さめぬ、
泥峴街の假の宿

龍山よりゞ朝々に
大栗の實を呼び賣りの
そのだみ聲の詫びしくもある

漢江暮雪

龍山津に日は暮れそめて
野にも里にも靑褪めがゝる
雪よ東の遠山ばかり
入り日に映へてうす紅の
あゝなづかしきその色彩よ
長き旅路の寂びしき宿に

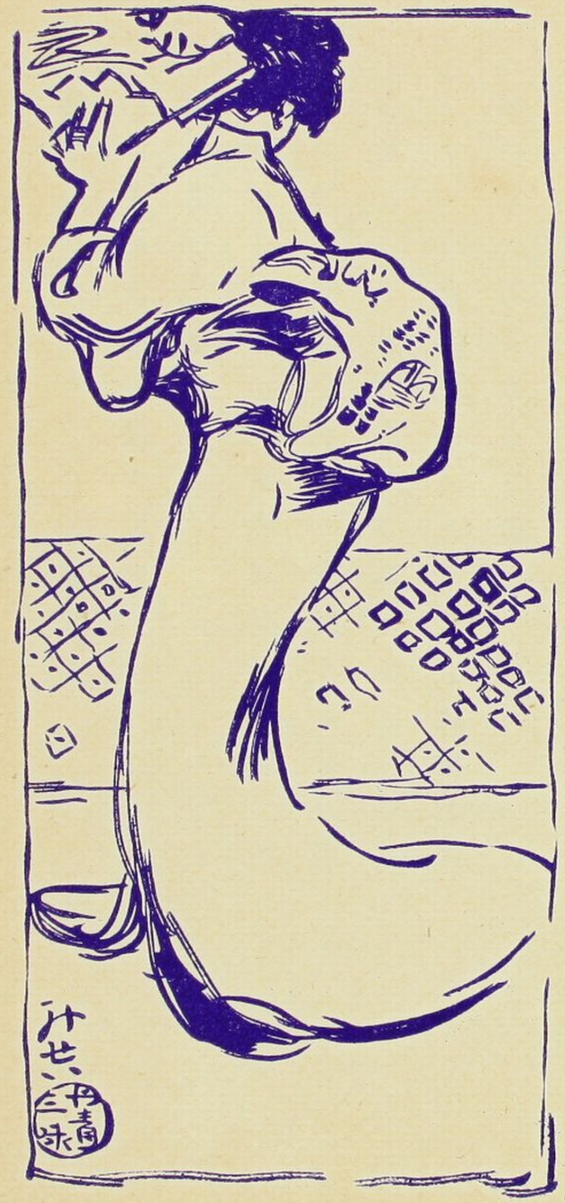


さむき枕に夢みし人の
まぶたを染めしそれにも似たり
眺め入る間をうすれうすれに
なごまぼろしと消えては失する
たゝあをあをと夕の靄に
氷を渡る蹄の音や

舞扇

かなしさに立ち舞ふ可くはあらねども
　ながき訣れの名殘として
扇とる手もしほしほと

『いざさらば　ありし雲井の花の袖　思へば
かゝる執着の　定家かつらの離れぬ中の』
離れぬ中の始めを云へば
あづまの空は故里に
稚な同士の筒井筒
浮世の風に吹き別けられて
あはれ五百里海の西
十九の春を高麗の國
流れづとめの伊達姿
漢城一の舞ひひめと
恥かしの名の媒や



知らず召されて見覺えの
騎兵少尉と嚴めしけれど
頰のゑくぼがをさな顏
『ふりにし事を聞くからに　比翼連理の
契りさへ　花に嵐のなさけなや　さら
に別れのなかりせば　千代も人には添
へてまし　よしや草葉に忍ぶとも　色
にぞ出でし吾うらみ』
ひらりひらひら扇の風に
鬢のほつれのそよぎてなびく
眼を合せては辛い笑顏の

背向になれば拂ふ涙か
蹴出しの裾のあかきは心
白茶の帶よいく度解けし
僅か七夜のかたらひは
余り短かきゑにしかな
北の荒野に君行かば
『風にちり飛ぶ雪の花　ちりやちりぢり
たゞよふ君が』
いくさごろものさゞ寒からめ
『戀しや昔ゆかしやと　あなたへ慕ひこ
なたを慕ひ　別れの床のうてなぞと

人目もわかず伏しまろぶ』

碧蹄曉發

いで老武者の白髮首
敵に贈るも惜しからず
死ねやと喝す一令に
見よ阿修羅王ぞ狂ひたる
額に當つる血刀や
前隊も後隊もひた驅けに
二十萬騎をかけ破る
鯨波の聲々鷄の聲

藁をふすまの夢さめて
碧蹄驛の山がけを
北に向ひて立出づる
丸寢のまゝの旅衣
一里の續く篝火に
薄紅の雪の色
王師野營の寂々と
まだし曉けねば音もなき
冷殺の風袖吹けば
息に凍れるうす髯に
鎖づる微吟の唇や

枯柳斷碑の里はづれ
西にひらける野を遙か
低くも垂るゝ雲間より
有明月の影洩れて
十里の雪ぞさやかなる」
あゝ人逝きて時過ぎて
昨日を今日を消し行くに
あゝ月の影雪の色
なぞや想ひの蘇へる
三百年のその昔
此處に破れし明軍の

屍の上に彷徨ふて
勝ちに誇れる吾軍の
旌旗の影に訪れし
月はかはらぬこの月よ
祖先の譽れ受け嗣ぎて
千里の北に遠征の
つはもの共が夢まもり
昨夜一夜を降り敷きし
二尺の雲の色もまた
過去のそれに變らむや』
今を昔に忍びつゝ

いづら荒野の曉の
雪と月とにイみて
幾重にたゝむ思出の
それさへ時のふるまゝに
若くも勇む同胞も
はた我さへも影と消ゑ
昔とならばこゝもとに
いかなるさまの世や遷る
いかなる樣の夢や曳く
思ひわびつゝ西東
眼れあやにかへり見る

野營の上に旗搖ぎ
　籌の煙活き出でゝ
今し天照る日の御神
　まづ紫の雲の彩
やまとの空は曉け初めて
　物悉くあらたまり
雪を枯木をさらさらの
　さらさらさらの朝風に
萬馬等しく嘶いて
　舊戰場に月は落ちたり」

開城の宿

征露の師屯して
　人騷がしき開城の
宿の小窓のうすあかり
　詫びしや酒も冷めたるに
僮は言葉相解さず
　家をめぐりて家鴨なく
三月寒き雨の音
　明日の草鞋や重からめ

觀月亭懷古之賦

水光天に交はる
明月の秋の色
夜警の柝に和す
韓山の雁の聲
杯をめぐらして
遠征の詩を作る
左將軍が醉伏しの
耳元に砲の音
元山より長驅して

大同江の流を亂し
朔寧の空馬塵揚りて
兵壯んなりや朱雀門
銃火箕城の上に注ぎて
十里に黄なる煙ぞ充つる
知れ倭冠のその昔より
劍は鉄とも石とも云はど
一機已に逝きぬ
恥づ驕將のいましめ
壁上に身もあらは
血戰袍を染めし

敗れても武夫の
夢のあとや松風
征露の帥再び
此城に屯して
殺氣天に冲り
三月花さかぬ
枯木の下の碑さむく
乙密臺に日は暮れて行く。

夕の思

今し傾く夕日の光
大同江の波に吸はれて
南にいそぐ舟の片帆の
行衛も知らず靄に消ゆるを
さながら稚兒の夢追ふ眼ざし
おぼつかなげに眺めて立てる
若き兵士よ何をか思ふ
病もやある肩は瘠せたり
江水幾里海に落つれば
海は八重波八百重の南
古里今や花のまさかり
樂しの春を遠くも隔てゝ

平沙の暗に死にゝ行く身の
回想草のいかにや萠ゆる
親もあらむを人にしあれば
男なればぞ戀もあらむを
たゞいかめしの戰袍に
裏みし胸をたが手に分けむや
吹く夕風に柳そよげど
刻みしに似て動きも得せず
帽の赤きが頰の白きが
御空が水が夜に溶くるに
身を倚せかけし破れ石垣を

離れもあへず只そのまゝに
己れも石に化すかと見えて
そもやいつまで飽かず行む

歸れ弟

歸れ弟夕の鳥の
林の中に沒る如歸れ
韓の平壤氣は腥く
乾ける風に殺氣ぞこもる
いかんぞ國の春を蹴立てゝ
好んで平沙の風雨を慕ふや

弟汝の白き額の
あないたましや日に黒みたり
戀と歌とを語るに澄みし
星の腫の猛くもなりぬ
稚兒なす覇氣の己むに難くて
八道の野に墓求めにか
歸れ弟夕の鳥の
林の中に沒る如歸れ
かの美しき優しきものゝ
情の絆燒いて斷ちしは
何が搦りし野心の炎ぞ

留めし袂を魔や拂はせし
云ふな却つて理めかし
兄をいかにと比べて說くな
汝に敎ゆかゝる處は
とはに情の春に追はれし
吾輩の怨みを吐きつゝ
濁りに沈む冷たき塚よ
兄の血の香をなどや羨やむ
疾く其腰の刀を捨てよ
歌の泉の淸くも湧けば
弟ながら神の若子よ

玉の器を守りて歸れ
別れの盃擧ぐるも遲し
憂ひて泣いて待つらむ人に
酷くも解きし其手を返せ
歸れ弟夕の鳥の
林の中に沒る如歸れ。

鼎嶺の書に酬ふ

「是は僕が南樣に一鉢の紅梅、それの、一輪である、香は失せやう色は褪せやう、併し君、君でなくては個中の消息は解るまい、きつすきつす、きつしてやつて吳れ」

見えざりき
そは見えざりき卷紙の
長きをかへし卷きかへし
打振ふても叩いても
燈火にすかしながめても
そよ牛込の坂の上
小さき庭に洩れてさす
春の日影の咲き出でゝ
友が安居の膝近に
句案の筆の指脫けて
觸れて散りたる一輪の

その葩は見えざりき
淡雪ならば消えもせめ
戀もなさけも捨てし身と
春に花なき此國の
砂上に臥すは詫びしきを
うれしき友が眞心に
東五百里吾國の
八十州の東風の色
只一ひらに乘せて來し
紅なるが香に匂ひ
冷え硬ばりし吾胸に

春の潮を湧かすべう
折りめなどよりひらひらと
落ちては來ざる影見せぬ
さては怡樂の詩のあるじ
春の神にも捨てられぬ
筆も折れよの冥示にか
再び解いて打ひろげ
また捲きかへし捲きかへし
捲きかへせども見えざりき
其うつり香もあらざりき

破瓢の書に酬ふ

「それがしが爲にはと、云はれるほど
のつらさを想へ未醒君」

あゝ故里に切なる戀の
二人が春に嵐よ吹くな
寫生歸りに打明け合ふて
さては同ドき夢に醉ふ身と
笑み交はしけむ其吾戀は
空しき影と消えて破れて
苦がき終りを忘れ果つべく

今高麗のわびしき旅寢
他人事ならずせめては友の
樂しき結末を聞かずもあらば
さは觀念の靜坐を解いて
神に詛ひの焰も吐かめ
あゝ故里に切なる戀の
二人が春に嵐よ吹くな

仁川港に大村琴花を送る

海と陸との往きかへり
一百二十有余里の

異郷の旅を共にせし
君よ歸るか故國の春
さりや伏見にかすむ月
淀を流れて朧夜の
難波に通ふ花の雲
鐘に曙けては黄金なす
菜の花ざかり蝶の夢
さこそは人も待つらむを
羨しとは吾云はじ
男にあれば吾云はじ
いざ乾し給へ高麗酒の

此盃を持ちかへり
北は平沙の八百里
戰の場の吾爲に
灘の名酒をなみなみと
春の香ひを充たせやよ君

閔妃陵

春風三月城の東
閔妃の陵に柳ぞ青き
人無き畫を烏鳴き過ぎて
もの云はぬ石寂かなるかな

妖艶の眼の一たび笑めば
八道の民悉く哭き
細きやは手の一たび指せば
大臣の首自ら落つ
色魔の骨よ今いかにぞや
美人の魄よ何處に去りし
五更の嵐梢に騒ぎて
玉壺櫻下に注ぎし血汐の
恨みの色の化すかとばかり
濃き紫の名も知らぬ花
塚のほとりの草に交るを

摘まんとすれば黑き小蛇ゞ
そもそも墓に穴や通へる
出づると見えて入ると覺えぬ

むかしのこひ人へ

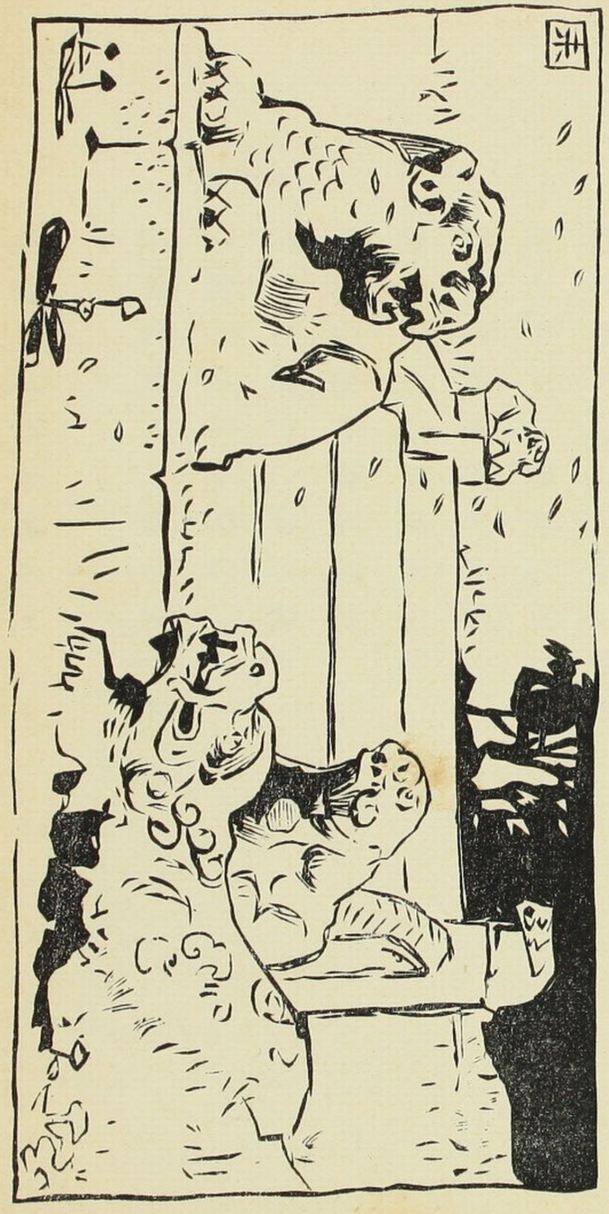
君が小さき胸の裡
吾俤の消えたれば
住み暮らすには狹からぬ
八十余州を捨てたりき
さはあれ苦き思出は

五百里遠き彼方より
離れもあへず追ふて來て
夜半の夢ぞなやましき

よし鴨綠の北に入り
平沙に骨をさらしなば
その思出はたちかへり
君が小さき胸の裡
吾俘はよみがへるべき

病兵

さくら散る　さくら散る
櫻花ちる
濟物浦の　布教寺の
假病院の
中庭へ　欄干へ
行く春の風
吹く儘に　吹く程に
櫻花ちり
いくさより　かへされし
病める吾身に
もののふも　かくあれと



教ふるにこそ

韓の老臣に代つて舊王城に懷古の情を賦す

吾皇畏こや舊城の塵を拂ふて
日人捷戰の宴にかし給ふ
誰ぞや冠沓に踏む兒は
訝かし主客の位ぞ轉ずる
招かれたるを榮とうれしみ
額づいて謝す韓の臣僚
日語を解すはあゝ敏いかな」

袖に吐息をつゝみも敢ず
楷を下りて御苑に立てば
白岳の雲何等の色ぞ
松よ古りぬる風何の聲
千株の梢千雙の鶴
あはれ爆竹の響に驚き
一庭の草一々の花
あはれ他人の襟に飾らる」

逍遙亭に潤流涸れて

臨水樓は影も映らず
後宮むかし錦の纜
玉蕭金管小舟を浮けて
白きやは手に蓮折りけむ
雅會は夢とまたもかへらじ」

荆棘、桃李の間に茂り
青草己に途を埋めぬ
僅かに石人苔の深きが
曾相識のわれを導く
破れし築地を南に沿へば

門自ら閉ざす蔓草」

正殿便殿寂々として
たゞ春光のうつるがまゝに
内閣政度人なきざはし
禁札のみぞ嚴めしいかな
仁政門の礎石の間を
たが捨て筆ゞ土筆と萌ゆる
位品の下の蒲公英
實はそよ風にのりて散るかな」

六角殿の柱に殘る
彈の痕こそあゝ痛ましや
親衛兵のいと愚かにも
銃倒まに御簾をねらふて
吾皇遷移の端を作りき
去月火鳩の夜亂れとび
新宮あしたに灰と化しては
漱玉軒の假の宮居の
殿せまうして政きく
百官なかば雨にぬれても
方二十里の此舊城は

物の祟りの潜む處と
絶えて還御の御意もなければ
三十六院蓬茂りて
四十八門甍は落ちぬ
御溝の柳むなしく青く
石橋斷えぬ佩劍の音
玉坐に白く積れる塵に
印する野獸の跡すさまじや」
耳をすませば靜かに起る
東の嶋の國風の樂

咄大韓の伶人等
いつか他邦の調べ習ひし
たちまち急雷轟くばかり
萬歲の聲空を震はす
どよみに散るやちりぢりに
亂れ散り飛ぶ桃の花びら
紅なるが血の涙なり
二朝歷事の老臣が袖。」

野調

（二上リ）

〔醉ふて戯れに妓が請ひをみたす〕

二千里外故人心

目のかゞみに映るかと
見れば涙にかげくもる
春やむかしの春ながら
人を遙けき海のはて

〔いろ文〕

窓の障子の夕やけの
あけよりあかき紅筆に
あかき心や思ひ染め
さまにかしく

髑髏塔の筆者

去歳八月故山日光に起臥して、吾知れる家の花園に近き室に、さる露國の名高き畫伯が來り寓せるを聞きしが、其人甚だ他に接するを忌みて、假の畫室を一目だも見らるゝを好まずとさへ云ふに、さりとは心小さき男かなど打捨てゝ、名の頭文字の一つだに知らぬまゝに過ぎたり。今年韓山に在つて旅順口外にウエレスト・チヤギン氏の彼の名將マカロフと死を共にせしを聞きつ、哀悼の念自ら禁じ難きものありき、そ

は人の相賊ふを警めて一將功成萬骨枯の意を寄せたる、髑髏塔の筆者は此のチヤギン氏なるを知り居たればなり、拙詩四章、聊か國を異にして思を同うする先輩の尊靈に手向けぬ、九月滿洲の野より歸りて、再び故山老親の膝下に一週日の閑を消ずるの際、吾師文哉先生を訪へば、一冊のノートブックを出し示して、是れチヤギン氏が遺物なりと云ふ、訝り問ふて、始めて知りぬ彼の閉戸翁は即ち髑髏塔の筆者なりし

事を、花園に秋草の花は今歳も露の色美し、ありし假の畫室のほとりを徘徊するに、只虫の聲のみ切々たり、淺からぬ感傷を抱いて家に歸る路上、老幼群り連して綺羅恰も祭禮の如くなるに會ふ、一流の旗大書して曰く「陸軍一等卒某氏之靈柩」

一章

人相殺す戰の罪
平和の神の御心受けて
世を掬くべくはた訓ふべく
君よかきしか髑髏塔の畫』
野より市より曳き出されて
國の爲ぞと死の坑深く
一令の下推し落されし
人さまざまの希望と理想
肉と血汐と消えて失せては
骨うづだかう荒野に晒れて
もの云はず只石にも似れど
一たび君が靈ある筆に
染むれば恨蘇り出で

馬上の功に驕れる兒等の
榮華長夜の夢に鞭ち
責めと悶えの淵に入らしむ」
あゝ殘暴のスラブの國に
君のいますはそよさながらに
氷海遠く暗き御空を
只一つ照る星にも似たり
眼あるもの仰がざらむや」

二章

こゝに東の島の國人

十年忍びし怒りは礙りて
義戰の旗の色鮮やかに
機を制したる二度のかちどき
韓山遼東滿洲の空
殺氣いよいよ低く壓して
生靈そこにそも幾千か
害はれむを君より見れば
無差平等の人の子どちよ
いざや平和の筆提けて
その戰と戰はむとか
旅順の港吾から乞ふて

甲板の上に畫帖展ぶれば
四月風なし春のわだつみ』

三　章

露艦七隻戰ひ利なく
舵をめぐらす水路の左
忽ち潮湧き立ちかへれば
すは水雷と叫ぶも遲し
脚下幾重の鐵板碎け
焰百尺くれなゐを吹く
頭上幾個の人拋たる

波十丈の青きを捲けば
海覆へり天倒まに
大叫喚の聲を包める
黑濛々の煙消ゆると
共に旗艦のあとも留めず
恥と傷とを帶びて浮びし
キルリ親王僅かに活きて
一世の雄才將軍マカロフ
卒五百人藻屑となりし
中にもわはれ氣高き白髯
大慈の眼不斷の微笑み

平和の神の御使の君
あゝ痛ましや筆を抱いて
畫帖空しく素きが波に』

四章

あゝ戰を罪と責めしを
破壞の鬼にや君詛はれし
深き同情のあまりに憎にし
其戰の爲に擊たれて
又わだつみの底の幽暗きに
貴き藝術沈みて果てぬ

黄人白人水と陸とに
勝ちぬ負けぬのいたはしの犧牲へ
それよ第二の髑髏塔の畫
現世再び染められずとも
焔と水のそがたゞ中に
身をもの描きし最期のさまゞ
とはの生命の畫と現はれて
世に戰の罪を示さむ
それ勇將の血汐に代えし
軍功後の男兒を誘はゞ
主義に仆れし君が精靈は

たくみの園の吾等に歸り
深き同情といや高々き
君が理想を受け嗣ぎ立ちて
人相殺す其禍の
其戰と戰はんなら。」

病軍馬を悲しむの歌

鈴を懸けし眼は
壁を洩るゝ夕の
光りより力なく
敵を追ふて嘶きし

唇に通ふうめきは
虫の聲よりひくし
風を拂ひしたてがみ
秋の草としほれて
肉落ちし肋の
あらはなる骨は
今ぞ末期の苦み
刻み刻みて動く
長く平沙に馳せて
秣乏しき夏を
黄なる水に毒あり

鞍の重きに耐へず
われは主に捨てられて
故里の若き春
牧の緑の軟草
戀ふるともすべなしや
十万騎勝ちいくさ
華やかなるいさはし
乘せて歸らむそれも
あだなるを奈何にせむ
人はよし倒れても
殘る名に榮えあり

われはむべし馬死して
骨さへも誰か收めむ。

配天に寄す

別れは苦き酒の味
冬の夜風に送られし
昨日は過ぎぬ春逝きぬ
君疾からドや時の脚
韓の都の此頃の
雨しげかるに思あり
柳の緑風吹けば

破れ壁に匐ふ蔦の葉の
はらはら雫こぼるゝも
優なる君が歌ぶりか
欄に啄む白き鳥
羽さき黄にして名を知らず
君が村居の窓に來て
詩思囀るはありやなし
水田に苗も青からめ
今年は蛙何と鳴く
去年の夏の市に立ち
共に詩稿を抱いては

三年涙を汗に代へし
其收獲の空しきに
寂びしき笑みを交しゝが
詫びて投げたる一卷の
塵尙未だ拂はずか
それ人の世に吾ありと
任ずる心高きほど
苦惱の淵は深かるを
自ら保て友よ君
あゝこしみを拂はむに
韓國酒は多かれど

一人してのむ盃は
吐息を受けむ器なり
吾此歌を見し夕
君が酒伴を拒むべく
その蓬生の門閉ぢて
吾寂びしを酌みて見よ君

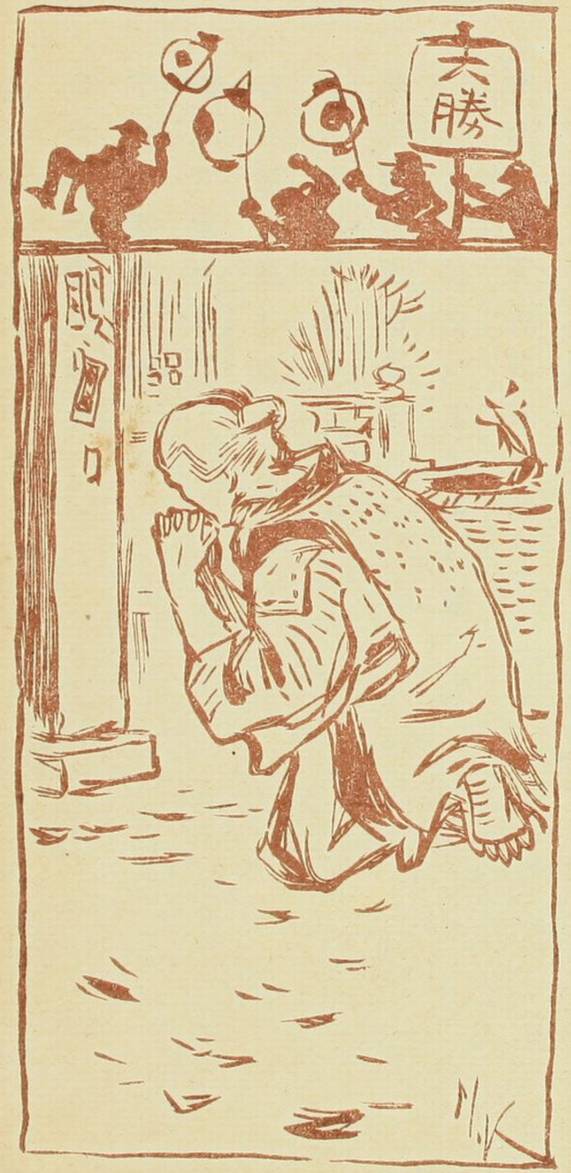
長髪賛

〔樋口二劍が寫眞に題す〕

送りし寫眞と行違ひに、先方よりのが着きぬ、われの戯ぶれ韓裝せるに反し、こは極めて眞面目なり。

二つ並べて突き出して、叩いて常に誇りし拳は隱れたれど、及をや卿むと堅く結べる唇、穩かならざる眼光はよく顯はれたり、頰の肉すこしく落ちたるは戀か、病か。

それ頂に分るゝを
巖に滑べる瀧と見む
肩に流れて渦まきて
脊になびきて亂れては
三尺二寸ふさ〳〵と
こや獅子王の冠か
寶刀の及に鏡して



蒔繪の櫛を嘲らむ
南の國の男の髪よ

月と病兵

燃ゆるが如き額の上
冷やかなりと覺えしは
窓に忍びて訪れし
月の影にてありけるよ
思へば去りし戰に
流れを削すしるべせし
目はあだかもけふの月

熱に眠りて熱に覺む
病の床の起き臥しも
早ひと月を經にけりな

あゝさやかなる月の影
彼の鴨綠の中島を
二人並びて進みしが
右に左に亂れとぶ
彈丸に驚く砂煙
たゞ一聲を名殘にて
あはれ故園に新妻の
秘めたる夢もそのまゝに

胸碎かれて倒れにし
親しき友が骨の上
今宵はいかに照すらむ
　あゝさやかなる月の影
異境の陣に病めりとは
音信れぜねば知りまさじ
老いたる母の只獨り
村端れなる詫住居
あしたの畑に耘りて
夕の市に葱賣る
いとゞ貧しきたつきにも

なほ北の方子を思ふ
夢をこめたるあばら屋を
今宵はいかに照らすらむ
　あゝさかなる月の影

朝鮮を去るの歌

（一）

平沙の北に吹雪して
蛤良山雲の色凄し
いざ人の子が禍の

大殺のさま寫さむず
袖の一枝を五彩毫

仁川沖の紅蓮焔
二艦の恥も收めたり
黄海道の土烟
三軍の苦も收めたり
使君車蓋の往來も
王城火馬の叫喚も
收め了せぬ五彩毫

（二）

さらば別れむ高麗の國
一百七十有余日
過こし方は夢にこそ。

漢江さむく黄昏れて
氷を渡る牛車
碧蹄驛の曉や
軍馬嘶く雪あかり
大同江に棹せば

そよ古戰場牡丹台
春南山のうす霞
手折りてかざす桃の枝
彩輿の窓をかいまみし
折ふし輿のすき心
隨花訪柳亭の下
水原花の雨やどり
七月黄なる日を避くる
龍山津の一葉船
洗劍亭に旅刀
二尺の錆を落ししか

松坡の里に息らひて
柳の陰の小酒宴
あゝ數々の回想も
過越し方は夢にこそ
さらば別れむ高麗の國、

（三）

高麗の旅寢の終りなる
宿の窓より眺むれば
港暮れ行くうす靄の
あなたに高き檣ぞ

いく夜寢覺めに忍ばれし
わが古里に行く船よ
うしと思ひし旅ながら
今日を限りと定むれば
啣める酒の味もなう
さすが一縷のうしろ髪
江山われを留むるよな

あゝ衰老の高麗の國
さながら秋の山の端に
消ゆて入る日に似たるかな

民常住の喪に服す
白衣の影ぞ寂びしかる
回天の業よし無くも
燈將滅時一閃の
譬諭も世にはあるものを
誰れか仁者の涙もて
拋乾坤の活手段
あらずか一世の狹骨は、
バイロンは世を隔てたり

いざや別れむ高麗の國

涙あれども力なき
わが如きもの両鬢の
霜となるまで住めばとて
興亡何の効かある
江山汝なまじひに
悲愁の色に誘ふて
弱き心を碎かざれ
親やまつらむ友やまつ
過ぎこし方は夢にこそ
いざや別れむ高麗の國

附錄

朝鮮日記

序

浪花の宿の小雨詫びしきに、東京上りの滊車は午後八時と云へば、其處彼處漫歩の興も窓より見ゆる路上の泥土に沮みて、只一人暮るゝを待つ孤影悄然と、手枕の夢は却つて故山に馳せず、住み憂しと觀じたる高麗の空に逍遙ひぬ

さらば茲に、小半年の旅假りの宿、燈下に鉛筆の走り書き、行李の底を探りて、いざや日記の皺をのべむ

日露事を起してより、觀戰の望を抱き筆を載せ今年一月韓山の雲に入つて、漸く平壤の土を蹈みたるばかり、耳は屢々北邊の勝報に驚きながら、心は空しく京仁の間に、荏苒として日を消するに飽きぬ、

國を出でゝ小半歳なり衣更へ

六月某日、吾社の急電歸る事を促し來る、想ふに吾配屬の定まりたるにやあらむ、踴躍程に上る船路陸路、休養一日の此の宿は、土佐堀の旅舍渡邊が二階、家も室も、一月十六日仁川航の船待ちに、半宵の夢は却つて行く手に馳せず、別れ來りし故山に通ひし處、今日の午睡の手枕に高麗の里を夢みしも、何やらの所以(よし)ありげなるこそ可笑(おか)しけれ、

七月十日歸東の途次浪速の宿舍に於て

未醒生日識

朝鮮日記の一

一　浪花の船出

夜半の夢は覺めぬ箱根の山、晝ならば右手に富士も見ゐむ、沼津は去歳曾遊の處也、窓より首を差し出しても暗ければよくも分かず、只停車場の西に當つて、一村松の下の燈火かすかなる家よ、吾三十五日假寢の宿なる可し、牛臥(うしふせ)の山、桃郷(とうごう)の花、目を瞑れば乃ち前にあり靜(しづ)が浦の松の風、繪の浦の波の音、戯れに喝ふて曰く

春やむかし旅の沼津の眞菰草曳く手に弱き夢を見しかな

車の出づると共に復眠れば、靜岡は何時過ぎにけむ、夜は白々と明け初むる濱名の湖の、水煙りも寒げなるかな、波の彼方を遙かに一葉船、漕ぎ

行きて末は小島の松影に消ゆ

車の輪の頻りに西に向つて轉ずるに從ひ、東訛り漸く聞えずなりて、名古屋辯京辯大阪辯、愈々喧しく、言葉敵きもなければ友が餞けの三國志を讀む、　吳と蜀と魏と、吾膝の上に相攻略する時、名古屋京大阪、頻りに日と韓と露の形狀を論ず

吾前に坐す人の、珍らしくも關東辯なる上に、釜山の冬は云々と語るを聞きて、問へば同國下野の出、釜山の商人白田某と云ふ、同じ船にの約は成りぬ、

京の八幡を過ぐる時、夥しき人の手に手に白羽箭を捧げたるが犇々と籠み入り來りぬ、想ふに今日は此處の祭祀などにもある可きか、光り輝く事何とやらの魚の脊に似たる衣、目を射て、男も女も香水の匂ひ鼻を

撲つ、僅かの間にも滊車賃一二錢の高下を論ずて、米價の騰落に口角沫を迸らす處、如何にしても上方氣質也、

一月十六日、暮れて大阪に入り、土佐堀の渡邊と云ふに泊す、主人半白にして年五十左右、熱心なる基督教の信者と云ふ、彼の名に高き河岸の宿屋の悽しきに似ず、大略に打任して飯を喰ふに給仕の婢も來らねど、船の切手荷の始末など主人自ら手を下して骨を吝まず懇ろに行届き、吾黨には少しく窮屈なれども禁酒旅籠の銘打つて宿料僅かに六十錢、茶代を裏めば双手を振つて拒む事急に、若し多く强ひなば額に青筋を張つて憤る可き氣色なり、

十七日、未明に車を驅つて、彼の釜山の客と共に商船會社の波止場に趣く、ランチの煤煙揚りそめて乘客早や群り居たり、河霧漠々とし

て北浪花の市の甍を籠め、南林かと訝らるゝ檣もおぼろに、東の空曉の影催せば、西の雲の端に星の光りぞ微かなる、インバネスに縞の脊廣きて、年の頃二十五六と覺しき人の、ランチに乘るを少時と止めて何をか悲しみ告ぐる、ひそ〳〵と私語くが、とき色の手巾に半面を覆ひたれど、此時此處たれか春を盛りの美しき人ならずと思ふ可き、人目を憚かれば、流石男也心強く振り切る袖、又も更に憐れなりし

流れに從つて下り、下るに從つて明くる空の、よく晴れて風も薙ぎたるに、吾心悠揚と高く昂りて行く手の方を眺めつゝ唇の動くまゝに吟じて曰く、曉に故國を辭して筆劍と伴ふ、浪花港頭韓に向ふの船、八道の生民眞に憐む可し、漢城々外胡茄の聲

金澤丸の吊り楷子を踏んで、二等室に荷を安排せし頃は、船の窓より朝日の光さし入りぬ。

二　浪の上

寄港二時間許、午後の三時に錨を捲けば、神戸の町は小さくなり行く、右に須磨明石左に淡路島、通ふ小舟の帆は、飛ぶ鷗の翼と共に白うして、晴れたる空は靜かなる海と等しく青かり、波去り波來り島來り島去る、名に高き瀨戸の內海を、甲板に踞して眺め居る程に、渺茫の其のあなた、見覺えありて心に留めて望めば、播摩の室津の邊なる繪島なりけり、去歳龍野に遊びて鷄鳴山の頂に昇りし時、あれと指されて少時眺めし、吾眼は其形を二年の間に忘るゝ程に鈍ならず、舊作のそれも思出の種なり曰く

眼を病む妹をのせて行く
淡路を出づるさゝ小舟
播磨醫師の好き所
さて松風のきゝどころ
繪島開いて波かすむ
鷗浮んで空かすむ
男聲よきざれ歌に
女ほゝゑむ片ゑくぼ。
夕やけの雲の色、珊瑚を涵す波の映、日暮るれば船室に入りて、同舟の誼
みは昨日の他人今日の知人と語り合ふ
漸う小夜更けて舵輪の轉ずる音のみきこゆれば、一人一人眠りに就き

ぬ、旅馴れて用意細き人は行李の裡より布團取り出して夢も安げなれど、吾は毛布二枚のみなるに、是より北に入らば、寒さも增すべければ、今より身を責め置かんと只一重のみを被りて横はりぬ、彼の縞の脊廣子は吾左の方に臥し居りて早や靜かなるいびきの聲のみなり、情濃かに意悲しき朝の別れを、いかなる夢にくりかへしてやあらむと思ひやるにも、吾枕の寒きを覺えぬ、

ゆうべ別れてけさ船出せし
主は今頃波の上
便あらば戯れに、曾根崎あたり(?)の窓に送らんを、呵々

十八日、 星消え消えに曉けぬ、鐵欄干に嘯けば、長風鬢を吹いて万里一望、波のうねりは周防灘をも過ぎて、馬關の瀨戸に船は入りぬ、昨日、人あ

つて伊知地少將の同船せるを語りき、かゝる事は吾此行に係り深くして、報知新聞二面の上段、馬關來電として伊知地少將金澤丸に座乘、今日當地を過ぎて朝鮮に向ふとも揚げなば、吾つとめには一の成功なる可ならむも、我はあたりの波の色空のさまを見るに忙がしうして、絶えて思ひも及ばざりしを、名刺の上に生來始めての肩書、特派員と記したればか、副官井上大尉ひそかに吾を閑所に招きて、軍事の秘密なれば打報無用と命せられぬ、愚按ずるに新聞屋とは下らなき職業なるかな、誰れか人に忌まるゝを喜ぶものあらむ、

艀によりて門司に上り、市中を漫歩しけるに、電話所とあるが目に付きて、思ひ出づるは友の某が事也彼れ飄零して琉球より歸り、一枯蓬の生涯辛く長崎の豪傑新聞に落ち着きしは早一年余り前なる可し、一たび東京に袂を分つてより相見ざる事は三年より短からず、此冬をいかにやと頻りになづかしうなりて、彼の脊廣子が其社に交渉する事ありと云ふに、頼みて一言を寄せ得たりぬ、彼れ元來肩を張り目を怒らして、常に風雲兒を以て擬するもの思ふに此頃多事の時、必ず韓山に再會せん事、蓋し物の數なる可し

夕の潮に船は出でぬ、六連島の燈臺漸くかすかになり行くを、征途万里の情、故國今より見難しと思へば、倚りかゝりし欄の中々に離れがたきを感じぬ、やがて波の音たゞならず、船の搖き烈しくなりて、それよ玄海灘に入りたるはと云ふ程に、ボーイ鐵盤を各人に分ち配れば、早吐逆の音異しき匂ひの耳に入り鼻を襲ふに、吾は山の上荒野の中にこそ口は聞け、坂東野武士船と云ふは山中の小湖の扃舟、房州通ひの小蒸氣の經

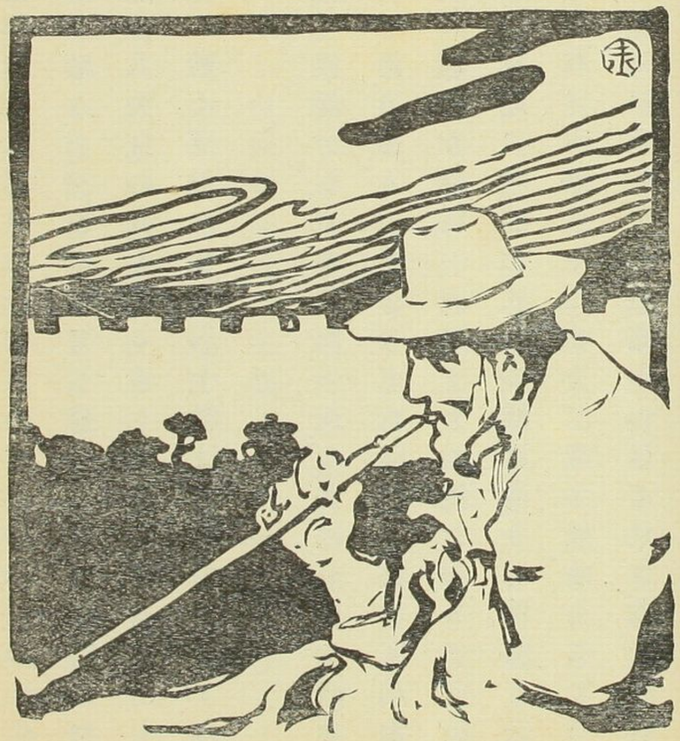
驗のみなれば、得耐へず甲板に出でゝ惡心の催すを避けぬ、

三　南韓航路

十九日、朝釜山に着く、此港燈臺の設け完からず水路亦曲折、夜の入港に適せずと云ふ、

小舟にて波止場に着けば、韓人悉く白衣なるが第一に目に珍らかなり、其天神髯に露を貫いて長煙管を弄しつゝ、悠々として太平を樂しみ顏なるは財を擁して坐食する輩也、脊に擔具を着けて、白布の鉢卷き、露頂、黑巾に毛の裏あるもの、頭は種々の樣異なれど、脚には等しく藁履を穿ちたる輩は、其日其日の生活する日本の立ン坊韓の所謂役夫なるもの也、其役夫の噂衆なる可し、頭に物をのせて往來するが、袴の形は洋風に似たれども衣の長け殊に短かくして、手を扛ぐれば乳房現はるれども習慣なれば寒からぬと覺ゆ、

釜山の街は日人の家のみに滿つ、韓民は優劣の理漸々退縮して、其處の山彼方の谷に冢の如き巢を營めれり、龍尾山は太閤征韓の紀念地也、立つて絕影島を望み、また灣を隔てゝ釜山



鎭の舊跡を望めば、彼の南無妙法蓮華經の旗印、堺の商人が小せがれの藥袋の旗印と功を爭ひ競ひ進みし、三百年の昔も忍ばる、京釜鐵路の起點たる、草梁は約十町程、韓の人夫日の人夫營々として材を運ぶもの土を堀るもの寒風砂塵の間に動く、三浪津まで三十哩は客車の便成りぬと云ふ

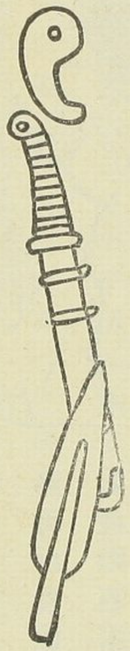
二十日、夕に釜山を發して、波靜かなる多島海の夜の、あけしは木浦港頭を去る四五里の程なりし、両方より岩せまりて、水路甚だ狹き所、往古韓の水軍に名を轟かしたる、曉將李舜臣が、両岸より鐵鎖を張りて吾戰艦を覆へし覆へし、豐太閤が軍、遂に木浦を收むる能はざりし舊跡と云ふ、船漸く進んで港口に達すれば、水路愈々せまくして大屈曲をなし、右に左に九十度三轉を經て除ろに進む可し、航路中の最も危き處とか、右に見ゆる群山中樹木稍々茂き邊には、今尙猛虎の棲むあつて、去歳大坂の某、木浦の防波堤工事の時、人夫の一人そが毒爪に罹りたるにが、直ちに大擧して山を分け谷を探り、長八尺許金毛の大蟲を獲たりと云ふ碇を投ずる頃西南の風急に起つて、靜かなる灣も波の立つこと夥しければ、一夜はこゝに明かす可しと云ふに、さらば其間を風土を探るに費さむと人を誘へども皆應せず、獨り小舟を賃して波止場に向ふに、白浪飛沫、屢々舷を超えて衣を濕しぬ、此處は釜山と異りて居留民も少なく市街も狹まけれども、南韓一帶の米穀は皆此地に集ると云へば、又一箇商業の要地なる可し、波止場の正面一坐の岩丘あり、殘壁老木由緒ありげなるを、問へば昔僉使と稱する我代官の如き、行政と兵事とを兼ねたる官人の舊居なり、石階を昇れば木浦一境眼下にあり、約半哩の彼方、港

口の左手の山に一村松の下一基の石碑立てるは是れ李舜臣が墓表。
両三條の街路皆吾居留地也、左に領事館を見て、警察署の前を行き、坂を
上る所、木浦新報社あり韓人街より左折すれば峨々たる岩山面を壓し
て立つ、宛として北宗畫中の者なり、打つゞきたる船路に飽きし吾は、獸
の吾巣に歸るが如く、一氣に一峯を登り盡せば、更に一峯の益々嶮峻な
るが現はれ來る、靴を脱して腰に着け、梁を傳ふ鼠の如く搔き昇れば、遙
かに南方明日の航程までも望み得可し、今しも、暗雲低く水平線上に垂
るゝ邊より、吹き來る强風は、岩角に絶りて四肢等しく滿身の力を極む
る吾をしも、直ちに拂ひ去りて下千仞の溪の底に投げ落さむほどなる
に、日本の畫客山野の癖あつて、特に來つて異境の山に囑目せんとする
に、山靈何の怒る所あつてかかくは我を遇せざると、怨めども及ばず、匍

匐して漸く降り去りぬ、歸
路再び僉使の舊館に過ぎ
る、彼の石階の左手、冬籠り
の用意嚴しき家の門あけ
て、立出づる人若うして唇
の花は高麗の荒野に咲く
可きにあらず、眸の星は韓
山の凄じき空に輝きさう
にもなきが、白く軟かき手
に物提げて、銀杏返しのほ
つれ毛徒らに風の弄ぶに

任かせつゝ、斜に海の方を眺めたるさま、是れ愁人の愁に耐えざる思か、笑ふ可し未醒が心は驚きて、其夜船室の夢と化したり

木浦は仙境也彼の九十度三轉の港口は軍艦の如き大いなる船を拒めば、騒がしき時局の噂も少なく居留民未だ多からざれば、相親みて兄弟の如く、静かなる内海に韓人の小舟、疑乃と櫓聲とは單調なる常住の樂をなして、而して彼の僉使の舊館、街南の岩山河口の三角島、また行樂に惡しからず、われ若し浮世一切の慾望を脱する事を得ば、希くは白衣の民となりて、此地に無爲の生を了らむなり、



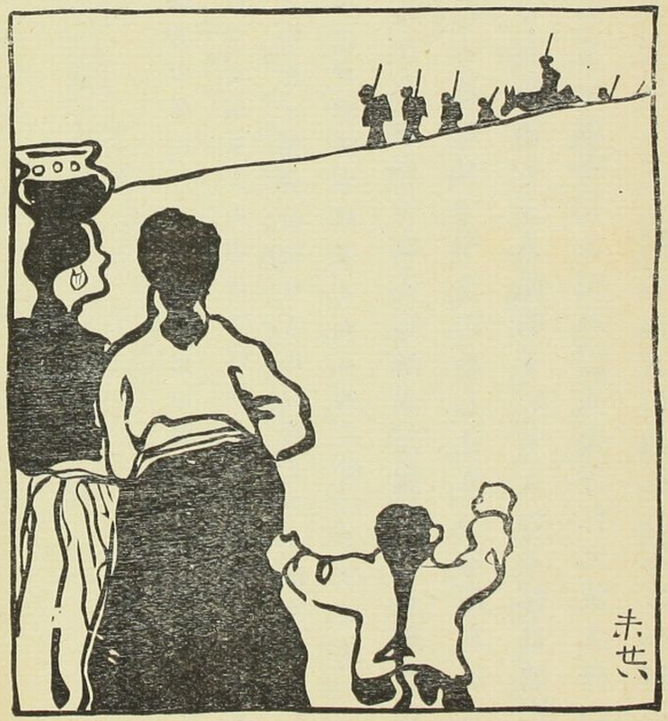
朝鮮日記の二

從軍平壤行

日に日に北に向ふ十二師團の兵の、ラッパの音蹄の響を聞いては、京城に空しく日を消ずるに忍びず、從軍公許の報はなけれども、切に司令部に乞ふて假りに其允しを受け、宿舍と糧食を給せられむ約さへも得て、先立ち發したる同業三人の後を追ひ、高橋春湖子ともろ共に程に上りしは、

三月一日　前夜岡氏が懇ろなる送別の宴の、宿醉未だ醒めざる重き頭を午前六時に擧げて、脚下から鳥の立つやうに、かしま立ちの用意あらかた調ひしは十時頃ありけむ、假寓の主人默軒子が、すゝむる杯は朝酒、むかひ酒、わかれ酒、袂を分ちて京城學堂に至れば、人夫方仁光、黄大龍の兩人、すべて堂長渡瀬氏が周旋になりて、例の白衣に油紙の小さき傘の

やうなるを冠りて待てるに、一椀の茶喫し了りて立出づ、方仁光は即ち學堂の使僕也、性を享けて善良、且つ少しく日語を解すが大いなる便となす、十二時に西大門を出外れて、右折して北に向ふ、あゝ六十余里の行程、曉に發して暮に泊り雨に風に、いく夜の夢をくり返す可き、



北大門の通りを過ぐる時、髯美しき韓人の兩班流の歩み悠然たるうしろより、被ぎ綠に色白き婦人の、小さき風車をそと帽の上に挿みしを知らず、行くに隨つて風のまに〳〵轉ずるを可笑しとて、陌上の小兒等しく手を拍つて笑ふを見る、韓國の天下は泰平也、

獨立門に至る、前にあるは往時の迎恩門の礎石なり、日清事了つて、清使路上の迎恩門はこぼたれ、洋風の築石獨立門は建てられぬ、他に依つて確められたる此の國の獨立に、獨立門は蓋し日本功德の紀念碑也、

此邊すべて岩山なり、一木一草もなき岩山也、山骨秀でゝ岩壁削れるが如きさま、又見るに足る、右手に聳ゆるを仁王山となす城壁南大門なり西大門より曳いて頂上に至り、蜿として長蛇の如し、成桂都を此處に定めてより今に至つて五百年、國危うして壁城また何の用をもなさず、憐

む可きかな、

道を開き岩を劈きし處、左右の湧州泉凍つて流れず、礙つて氷柱となつて頭上にかゝる、北風甚だし、路の土赤うして靴の底は血を踏むが如し、遙かに白鶴の中空に舞ふを見る、石に刻して楊州の界とあり、若し彼の脊に騎する事を得べくんばなど、賢からぬ事を思ひつゝ見上る額に、白羽毛の點ずるよと覺えしは雪の降り出でたる也、兩人相顧みて、行路難是より始まるとぞ云ひき、

此日行程五里許、惡路に疲れし足を曳いて漸く高陽にたどりつけば、今朝京城を發したる十二師團の輜重の馬は未だ馬寮の設けにいたらず、雪中に繫ぎ捨てたるまゝ也、兵卒の一部も亦、枯木の枝の焚火を圍みて寒げに踞り居るがあれば、先約のありとは云へ吾々の宿舍も果たして如何ある可きと危みつゝ、司令部に演面參謀を訪へば宿舍の事は管理部副定に委したりと云ふ、轉じて其人を求むるに他に出でゝ未だ歸らず、主僕四人綿の如くふりしきる雪の中に、袖を拂ひ拂ひ立ちて待つ事二時間余り、日は已に暮れてあたり薄くらうなり行くに、また立出でゝ彷徨ひし果、漸く會ふ事を得て聞けば、宿舍の事は千代松少尉の知る所と云ふ、心平ならざる吾徒よりも、重き荷を負ひて未だ夕べの飯も得ざる從僕の苦は如何ならむと思ふにも足の急がれて、更に四方に奔走して辛くも千代松氏は求め得たれども、宿舍は已に充溢したればとて、韓屋の三疊敷ばかりなる温突に、五人の騎兵の横はれる中に入れられぬ、二人の從者には何處にも宿を求めよと出しやりつ、膝をかゞめて坐し居るに、土にて塗り固めし床の冷たさ、肉を碇し骨に徹するに耐へず、主

人を呼びて書いて見す、冷難凌、須用薪、と云へば、家貧而有八十老父臥病不得適貴意、と答ふるに己むを得ず陣中の物語りして七人孤燈を圍みて坐しぬ、兵の中の新兵なる可し、吾等の爲に炊事場より糧食を運び來りしかば、よし半熟の米硬く、よし鑵詰めの牛の凍れるが二三片のみなりとも饑えたる肚には八珍の美味とも思ひて喰ひぬ、さはれ床の冷ゆるは時を經るに從つて酷だしく、吾忠勇なる騎兵諸公も亦、行軍難の怨聲を吐くに、再び主人を呼びて若干の韓貨を與へ、買薪金と書いて示すに、夜已深矣、人已眠矣、不得買、去らば詮方なしと七人毛布に裹まりて、肩を並べ脚を重ねて疲れたればぬる夢も、折々皮肉凍ると見て破れぬるも詫びしや

雪のやど故郷の夢は凍りけり

此里に古びたる門あり、題して碧蹄館と云ふ、小早川隆景陣をかへしたる處なる可し、征韓之役の昔、征露の師の今、地下の老將軍は正に兒孫を得たるを喜ぶ可し

二日、 同宿の騎兵が起き出づる劒の響きに眠覺めたるは午前四時半也、未だ暗けれどかゝる寒き處に、只二人殘りていかなるゆめを結ばむやとて、結束して立ちがけの朝餐、光り薄き燈の下に齒も凍るばかなりき、方仁光等もぬむげなる眼して氷りて昨夜は何處も日本兵充ち滿ちたれば、殘飯氷りて腹に飽かず、土間寒うして眠り難かりしと云ふ、春湖氏と共に慰撫して家を離れ行くに、雪の深さ一尺、路上人馬の跡もなし、里を過ぐれば軒の下の薄明り、軍醫部とはり札せし門を叩くは、一卒の脊に戰友を負ひたるなり、負はれたるは急に發りし病の爲なる可し、千

里遠征の路病に染みし心中いかに、

山影なればそれとも知らざりき、里を出外るれば雪上に長き影あり、左手の空に落ちかた月、荒野漠々として斜に廣きは、そのかみ雲と簇る明軍を、逆にむかひ擊ち破りけむ、古戰場には非ざるか、杖を留めて停止、感懷自ら禁ぜず

一里余り、行くに低き峠あり、両方の岩せまりて、頂に大石を列ね敷きたる、何様屈竟の要害と見ゆるに、地圖を案ずれば碧蹄館也、老將隆景が小勢必死の勇、明の大軍を眞坂落しに追ひ擊ちしは此處なる可し、宿次ぎに徵發されし人夫と覺しく、前の方よりは韓人夥しく群り來るあり、顧れば先發の歩兵整々と雪を踏み進む、方仁光等二人、昨宿の疲勞に顏色青きを憐みて間の宿とも云ふべきやうなる、四五軒の小村落に息みて、飯など食はしめぬ、

坡州驛は高陽を去つて五里なり、楊柳田畝の間に連りて古風の建築甍落ち粉壁剝げたるが見ゆ、耕人農牛日麗かなるに徘徊す、

此日行程七里、昨日の雪溶けて泥濘眞に脛を沒すれば、歩兵と軍馬の路に倒るゝもの少からず、況んや吾輩の脚力に於てをや、十歩に休み二十歩に踞し、落伍の兵等と諸共に、せめて燒くが如き喉咽の渴を醫す可く、濁水と殘雪と手に任せて飲み且つ喰ひ、たどる〳〵山を越え川を渉る、相顧るに生色なかりき、漸く最後の峻阪を上り盡せば、眼下に展開せる平野をめぐりて一條夕陽に映ドて明なるは、是れ鹽津江氷上の雪の色也、思はず歡呼して落しゝ腰の、直ちに土中に根をや下したる、しばしは起つに難かりき、

岸に到れば樓門あり、鎭西關と題せり、河の氷は多人數の一時に渡るを

危しとて、工兵が監視の下に、蟻の如く一線に連りて行く、昨夜の宿に懲りたれば自ら求めむに若かずとて、吾一人先づ川を渡りて左岸に達す、誰何甚だ嚴也、行けども行けども軍馬村々に充ちて一軒の明き家もなきに、半里ばかりにして脚をめぐらし、春湖氏と會して更に議を盡くさむとす、日は全く暮れて東山月明なり、且つ眺めつゝ歩むほどに草鞋の底は氷りて堅きこと石の如し、川の此方にて春湖氏と會ふ、氏も亦獨り待つに耐へず、痛める足を曳きつゝ人夫を伴ふて來りしなり、

方仁光奔走頗る力めて、江畔漸く一軒の茅屋を認め得たり、但し其吾兵が宿舍たるを免れたるは、軍役の夫の滿室に宿せるが故也、舍主の拒絶を說破したるは、方仁光が熱心なる辯舌おりし、

うすあかく洩る戸を開けば、早く朝鮮的異臭の鼻を襲ふを覺ゆ、さはれ

昨夜の宿に比すれば、室も廣く温突に煙も籠もれり、両人大に喜びて朝鮮草鞋を脱し内に入れば、同宿の韓人等忙はしく席を避け帽を脱して長揖するに、貧弱の國の民は自國に在りてもかばかり心弱きものかと憐れになりぬ、荷の中の蠟燭をとぼして、春湖氏が心利きて酒保より買ひ來りし酒と肴とに相對す、一盃両盃室暖かに肚も寒からず、空氣枕に息を吹いて韓人を訝らしめつゝ眠に入りぬ

三日　今日故山にあらば姉が秘藏の雛の前に、笑ひ興じて白酒を祝はむを、

朝七時に立ち出でぬ、軍は今日一日を此處に休養するなりと云ふ、昨日の惡路の故なる可し、路の傍ら荒れたる畠の霜の中に、黑きものあるを見れば軍馬の倒れ死したる也、重きを負ふて險きを歩み、筋絶ち骨碎け

たるにや、よもすがらいかに悲しみ鳴きけむ、右の前脚もて悶え〳〵地を掻きたりと覺しく、小石交りの凍れる畠を深さ尺ばかり圓形に堀りなしたるが、其底の方には赤黑き血の凝りて淀みたるがあり、得耐へず眼をそむけつ、實にや是一つのみにて行軍の難を料るに餘る可し、此のあたりの地勢、小山脈の幾條ともなく路を横ぎるありて、其間々に田園と部落とは點綴す、小山脈の峠々は、多く小石を亂積したるを、方仁光に問へば両手を合して拜む眞似したれば、推するに道路神とも云ふ可きものなる可し

開城の北の山の蛇の如き長壁を望み得る處、小松生ふる丘の下一條の細流あり、大いなる切り石もて組み合したる比較には廣き橋の、形頗る佳きに石碣題して吹笛橋と云ふ、いかさま名と云ひ處と云ひ若し夫れ

秋天月明の夜、一聲の長笛松風に和しなばとゆかしさ限りなし、路曲折して行く事里余、傍に夥しく例の縣官郡司が不忘の碑の列なるを過ぎ盡せば、流れ來るいさゝ川のあなた、枯木林のひま〳〵に人家の棟隱見して、温突の煙夕の靄ともろ共にたなびく處、即ち是れ開城府也、行程は七里と稱す

開城府は人口五萬戸數一萬、古の都にして吾國ならば奈良とも云ふ可きか、舊跡尤も多しと云ふ、豪馳橋を渡りて廣き街路を行けば、日已に沒してかの煙と靄とます〳〵濃かに、天地總て淡青の色に化して、白衣の人紅衣の兒綠衣の女、其間に逍遙するがおぼろ〳〵と、眞に夢の國に入りたる思ひをなしぬ、

南大門に至れば吾先發の兵站部已に在り、路の両側長く假り馬寮を建

て列ぬ、此日春湖子甚だしく脚を痛めて方仁光も亦顔色疲れたり、門の外橋の畔、正軒と云ふ居留民の宿舎に投ドつ、三尺許の浴槽に兵卒四人が間に交りて寒さに戰きつゝ、僅かに垢を洗ひしが云ふ可らざる快を覺ゆるさへあるに、日本酒あり蕎麥あり刺し身あり、

主人は熊本の出、自ら客に接し自ら庖丁をとる、餘は韓人の壯少二人言語相通せざれば單に薪水の勞に服するのみなる可し、主人公八字の髯を捻して脊廣の袖を捲き上げ、九州辯もて「きつうごはしたらう」などゝ御世辭を云ふ体頗る珍となす可し、此の際此の時、只一軒のみの宿屋なれば、客の方より腰を低くゝ頼みて、辛ドて宿りを得る程なり、

四日 今日は脚を息めむとて、午前は各々本社に送る可き通信をかき、午後は出でゝ司令部を訪ひながら市中をめぐり見ぬ

五日 午前七時半出立、城壁に沿ひ西大門に至り折れて西しぬ、昨夜の雨は夜半の夢を破りて旅愁を誘ひたるのみならず、開城以西は安しと聞きし道をまたも泥にして脚半半ばまで汚さしめぬ、一里餘りにして斜めに右手の險山より左手の溪に走る石壁あり、路に當る樓門題して青石關と云ふ、京畿道と黄海道との境なり、春湖子遂に草鞋に足を破られて、歩々に紅の滴を印す、「玉のやうなるふんあし、穿きも馴れたまはぬわらんじに、痛ましくも傷れて、赤きものに道芝を染めさせ給ふ」などゝむかしの合卷物奥方城より落つる段に筆を舞はしたるも、思ひ出されて後姿(うしろすがた)のあはれ也、

行路難は吾等のみならず、兵の倒るゝもの、馬の倒るゝもの此日尤も多し、金川に今一里と云ふ小部落にて、方仁光をして宿を探さしむるに、や

がて歸り來りて見出しぬと云ふに隨ひ行けば、如何なる事に快からぬにや、其家の老母なる可し方仁光を捉へて嘲り笑ひ怒り罵る言を少しも解せねども、其面色の兇惡なる、幼き折りに奪衣婆の彫像を見て屢々夢におそはれし、其面影に少しも違はず、多寡が一人の愚婦なるに、思ひ出す毎殆んど畏怖を交へたる不快の念に耐へざるを覺ゆ、

冬の月、柳なりけり枯れにけり

己むなく夜に入りて金川に到り、戸數三百と聞きたれば、單獨にては得難かる可しとて、監理部とある家に千代松副官を訪ひ乞ふ處あり、示されし家を四人して求むれども夜目なる故にや分かぬに、春湖子歩む可らず、人夫二人をつけて辻に殘し置き、我一人暗中を亂走して二たび監理部に到り一たび司令部に詣り、四たび目に兵站部に行きて、將卒が叱

咤と惡言とを忍びたる末、漸く其家は知り得たれども、己に先ちて在る者、彼の高陽にて同宿せし騎兵五人他に歩兵廿人、到底吾々が膝を容るゝの餘地もなく、加之兵等が隱言もて排斥するも面白からねば、落膽して歸り來るに、方仁光は途上の小兒を要して好き宿舍を見出したりと云ふ、勞を謝し喜び走りて漸く草鞋を脱する事を得たり、時に夜は更けて正に十時を過ぎぬ

きびがらの煙や夢の迷ふ宿

夜半、兵站部の宿舍掛りの軍曹某、戸を叩きて呼び起し、此家は病兵の後れて着きたるものゝ爲に、豫備として特に明け置きしもの也とて、詰問頗る急なり、宵の程の苦勞に代る可しとて、春湖子是に接せしが、眠れる眞似して聞き居たるに、足の如くには疲れぬ子が辨舌、辛じて追放の難

より免れぬ、再び枕に着けども眠ならず、蓋し両人共に平ならざるものあるが爲也、

六日　午前九時出立、一行多く足を痛めて、黄大龍のみ獨り健也、前夜軍曹の去りしあと、両人相議して平壤に從軍證を得んまでは、決して軍隊に就きて宿を求めんと欲せざる可く、從つて宿舍は軍隊の留陣せざる小驛を撰ばむと定めしかば、平山郡を去る事里許、松隅洞なる小村の客舍に杖を留めぬ、行程僅かに三里半、午後三時也、

吾等が入りし時、室の一隅に餅を作る一豪傑あり、蓬頭黑面にして眼光鋭し、手下の一人をして餡を盛らしめ、一人をして路に立つて過ぎ行く兵卒に賣らしむ一個五錢、二個十錢三個四個賣るに從つて作り、作るに從つて賣る、數十の白銅たちどころに盆上に滿ちぬ、豪傑名を告げず、曰く、多年滿韓の間に逍遙せり、今年の時變によりて產を失ひ三四人僅かに身を以て脫れ大連灣に英船の救ふ所となりて仁川に到りぬ、再び北に向はむとするに錢盡きたり、かく餅を賣りて且つ進むのみと、

豪傑と其徒と、餅盡きたれば荷を收めて、未だ日もあれば次の宿まで行かんとて立ち出でぬ、春湖子と人夫と皆な一隅に困到して夢に入りたるやうなるに、せまき窓より差し入る夕日、立ち舞ふ塵のあざやかに見ゆる下、獨り坐すれば思ひ多き、京城なる友の平山子が、はなむけの聖書を讀む、此時殊に胸深く物の通ずるを覺えぬ、

前なる山に石壁あり、くづれ朽ち傾きたる樓門西日の影を受けて物さびしく、むかしはいかなる人や住みけむと、由來を問はむに言語通せず

まもり合ふ火なき爐ばたや高麗の宿、

七日　昨日架橋縱列と相前後したるに駄馬の爲に路をせばめられて甚だ歩み難かりしかば、今日は午前四時に起き出でゝ、五時に立出づ、月半輪の白きが西に照りて曉風襟さむく髯皆凍り、滿天星霜燦として光り明なり、一里半にして南川店を過ぐ、舍營の吾軍眠り未だ覺めざる可し、東の方黄紅の色を染むる頃里はづれの川を渡る、幾百と繫ぎし馬のたてがみに霜ふきて、早出の兵士火を圍みて語るもあれば川の水に炊ぐもあり、

川に沿ふてさかのぼり、葱秀店を過ぐ、家三十ばかり川の山に當つて一回したる處にあり、其山岩嶮しく樹多く宛として吾鄕絹川の上流栗山村に似たり、吾先口を開いて両人しばしは故國の物語りに興ずぬ、

安城站を過ぐ、同ど川の沿岸也、家は二十余戸、晝餐に粟の餅を喰ふ、柔かにして味濃かなれども惜むらくは甘味なし、砂糖を携ふるは韓地旅行の一要件たる可し、程なく川と別れて道は右に折れぬ、草上に火を焚いて休息せる時、一兵卒の獨り來るあり、問へば京城にて腫物を病み入院し居けるも已に發したる戰友を思ふて脾肉の嘆に耐えず、強ゐて乞ふて途に上りしに、腫物二日の間に癒へぬと得意氣也、

又一兵卒の劒を横たへて輿に乘るあり、開城にて浴みしながら誤つて脚を傷けしに、軍醫の靜養をすゝむるを肯かず、行き能ふ限りは行かんとて、擔夫を賃して進む也と云ふ、

新川に至る、兵竝部あり兵の留り宿せるもの少からず、其多くは豫備兵にして己が在る地の名さへも知らぬがあり、軍隊の行動は一命令のみ、他なきなり、一片の召集狀は忽ち萬里の外に身を運び來つて、故鄕の雲

の色も見分かず

國のゆめ夜寒の風や吹き寄せし

午後三時方仁光遂に歩み能はず、路傍の韓人を雇ふて漸く端興に達する事を得たり此日行程九里方仁光の疲るゝも又理なきに非ず、但し昨日己に七分の沮色あるを見て、彼が荷を三分し、一分を黄大龍に一分を吾自ら負ふて其肩を輕くせしめしが、元來彼が風采上品、遂に是勞役の人にあらず

此地戸數千余と稱す、郡守の居る處也、川あり吾彈藥縱列の駄馬夥しく此邊に繫がる、橋を渡れば家々皆兵也、辛ドて一軒の空屋を占め得ぬ、酒豚大根、悉く方仁光が勞れし足を曳きつゝ買ひ來りしもの、乃ちむかし自炊生活の覺えある腕に春湖子が携へし鍋の蓋を當座の俎板となし

ナイフもて調理し了り、養ゆる間も待たず箸をつくるに尙例の朝鮮的異臭の脫せざるを覺ゆ、思ふに醬油の裡にやひそみ居たりけむ、佛說の地獄苦に、口をつくれば飯椀中從つて火を生ずとあるに似たり、

八日　午前八時出立、春湖子が脚愈々痛を增し、吾と方仁光亦艱色あり、里を扳

けて橋を渉る、凡そ義州街道を韓國中の道路に最良なるものと稱せらる、されどもこは韓廷の經營に依て然るにあらず二十七八年役に吾工兵の道すがら修繕したるに因する也若し夫れ處々大小の橋梁に至つては、當時架橋用の鐵船を利用したるのみ、今年日露の事起るに及びて、始めて完きを得たるものと云ふ

顧れば家々の朝けぶり枯柳稍々色づきたる間をこめて、映波樓の甍もかすかに川の水清く、瀨に立つ漣の音もなく、紅衣の小兒が嬉戯するもの三人、黄帽の騎兵が北に向ふもの五々、日はうらゝか也、風は微也、口吟して曰く、一村の楊柳一川の色、三日の東風三月の春、昨日南川に休養したる司令部の、參謀長等のみ北に進むを見る、大同江の溶氷にや

抜けがけの五六騎いそぐ雪解水

一輜重、兵の病馬を曳いて、自らも亦長き杖にすがりつゝ行くを問へば、一昨日の夕悍馬に蹴られて左の腿は今に碎くるばかり疼めど、隊に後れて同ド境遇の人馬相憐みて徐行すと云ふ、其顏青黑く其唇色あせて吐く息も苦しげなり、

路傍の芝に臥せる歩兵あり、戰友なる可し一人懇ろに介抱しつゝあり しが、今曉より腹痛耐へがたきに、軍醫は居ながら見もかへらねば詮方なく進み來りしかど、今一きは痛みて足も運ばれず倒れぬと云ふ、幸ひ吾親戚の醫師のはなむけの藥多く持ちたるを與へけるに、暫くしてやゝ生色をかへしたるやうなりきあゝ行軍の難は戰爭の難より酷し」

戰爭一び起るとき、先づ野に耕す國民の汗と膏とは過重の負擔となり、最も生產力に富める壯丁は業を廢し職を止め、三軍萬里の路を行けば

或は寒或は熱、氣候風土と嚴峻なる軍規とは未だ戰はざるに人を倒し、旗鼓相見ゆるに至つて生靈幾千、血流れ骨碎く、かくて光榮ある、戰勝は、遺族の涙を以て彩られて靑史に殘る也、あゝ、あゝ、

一小驛に至れば路傍に餅を賣れるが即ち彼の松隅にて識りし豪傑也、爲に久しぶりにて一椀の茶と甘き餅とを得たり、方仁光此處に至りて氣力全く盡きぬ、然るに彼れ魯直の性、甚だ其任を果さゞるを恐れ、平壤の土を踏まずして此里より歸さるなきかを憂ひて、人を請ふて左足の腫れたる肉に深く鐵針を貫かしむ鮮血迸り流れて床を染め痛ましき事云ふばかりなし、早く知らば此の蠻的治療を留めたらんを、吾等に忍びて爲したる事なれば詮なし、懇ろにいたはりて藥などつけやりつ、假令荷は負はれずとも、目的地までは必ず同伴す可きよし云ひ聞かせしに、苦痛の裡にも微笑して喜び謝するさまいとゞ憐れ也、

人夫を雇ふて彼が荷を負はせつ行程僅かに四里半興水院の西四丁、川を隔てゝ柳の下の小村の、新院と云ふに宿りしは午後四時頃なりき、此處吾兵站部あり、砲兵一大隊舍營、酒保あれども酒なし

九日、 前夜方仁光の代に雇ひたる人夫を加えて一行五人、午前四時半黑雲の間より折々洩るゝ殘月の光を便りに立出づ、一里余にして劍水驛に夜は明けたり、戶數二百許、人家割合に整備せり、五里にして鳳山郡に達す、路を挾むの楊柳、隱見せる堂廊、風情目を喜ばせしむるに足る、方仁先生荷は肩に空しきに脚の痛み未だ癒へず、時々地上に坐して瞑目して休息す、水滸傳の林仲の如し

鳳山の住民約三分の二は吾兵馬に驚いて逃走せりと覺しく、市を過ぐ

れば空屋連る、人夫に飯を給す可きなし

破れ樣に冬の日影や鳥の糞

春湖子亦林仲の徒となる、馬を求むれども得ず、輿を求むれども得ず、牛を求むれども得ず、偶々ドンキーを曳いて過ぐるものあり、吾喝令して絆を奪はんとすれば、疾く走りて避くるに追ひ着き得ぬほど吾脚も吾に叛けり

砂石の道を行く事約一里、前に峻嶺あり、しばし脚をやすめて草上に坐する時、鳳山より相前後せし軍曹、吾荷の上にアルミニーム製の行厨嚢を認めて、前日一兵卒の盗まれたるものとなし、辭色共に厲しく、劔を按じて詰問するさま恰も罪人に對する判官の如し、朝鮮に到つて盗賊の疑を受く可しとは夢にも知らざりきと可笑しき裡にも心頭幾分の怒

氣無きにしもあらず、吾れと吾名を衛り保つに足る内地ならば、元より容す可きにあらねども、今の此處は人相殺す戰の地なりと思ひ返して、辯解に努めて漸く事なきを得ぬ、

鼻を衝くが如き峻坂を登り盡くせば祠堂あり、老翁御虎の圖を懸く、望亭あり洞仙亭と題す、彫字の板額清使此に過ぎる折の詩賦を見れば、蓋し嶺の名を以てせる也、此邊昔樹木繁茂し鎮西の要關として間々猛虎の出沒せるありきとか、苛政虎よりも猛く、一たび大院君伐木の令によりて山皆空しく一望濶然たり、行く手に高く連る山に、蛇の如く長き石壁を見る、山下の小驛は、そのかみ支那兵入寇の時、石灰汁を米の汁と詐り呑ませて殺せりし處と方仁光は語る、淺はかなるたくみに乘せられし敵兵は思ふに方仁光以下の人物のみなりしなる可し呵々

此日行程七里、あいあむと稱する小驛に泊す、時に午後三時半、此里に至る比、赤十字の擔架に乘りて黄州方面より歸されし病兵數人に會ふ、附添ひの看護手に問へば多くは消化器よりの症なりと云ふ、

里はづれに城門朽ち破れて僅かに穹隆の組み石のみ殘りたるがあり、地圖の舍人關と云ふは是なり、石壁は是より前の山上に至りて連る、此邊すべて岩山にして彼の唐畫風の折帶皺と稱する描法其まゝ也、夜眠りなりがたく、扉を押して望めば星河明かに空深碧の色を礙らし、さながら巨人鐵甲して立つが如き即ち彼の岩山也、

星かげの眉にせまるや冬の山

十日 午前六時半出立、路は行くに從つて下り下るに從つて平野開け、三里にして黄州城に達す、黄州城は黄海道の首都として石壁めぐり城門聳ゆれども、民力は却つて乏しきが如く、戸數も鳳山に上下するのみ柳を分けて行けば河あり組練の如し、橋を渡れば樓門あり、題して城南門樓と云ふ、門の左右吾軍のテント多し、兵站部の所在地なればなり、右折すれば更に二層の樓門あり、結搆大なれども甍空しく破れ落ち蓬草屋に枯れて風になびくさま、亡國の古城を訪ふの想ひあり、此市住民亦多く逃走し盡せり、

うつばりに鼠の骨の白きかな

甍いく秋月の洩りたる、

煙草を買ふ、ヒーロー一個金二十錢、朝鮮飴を舐る、一棒十錢也、西門を出づれば武裝せる歩哨の立つて街上を警戒せるを見る、行くに從つて田野益々開け一望濶として目に遮るものなく、畝より畝に連りて悉く鍬

の刀尖の觸れぬ塊もなし吾國ならば此あたりの村落に、白壁の土藏を圍らしたる豪農の家を見得可きに、韓國の民は只管に郡守の强掠を恐れて、努めて貧窮を裝ふに依り、茅屋敗壁宛として吾渡良瀨川沿岸のそれに似たり、

山路は險なれども風景變化多ければ心亦轉ず、平野は夷なれども風景單調なれば眼甚だ倦む、只時に長天鴈行の斜なると、壠圃雲雀の囀るとに意を慰めて、行きて午後四時に到り、黑橋驛に宿りぬ、奇なるは從來の客舍、概ね吾等の宿するを忌みて爲に方仁光の勞少からざりしが、此里のみは主婦自ら戸外に立ちて爭ひ呼び、室に入れ歡待之れ力む、何の故たるを知らず

黑橋は即ち黃海道平安道の境界なり、明日は平壤に入る事よと思ふに

心喜びて、宿の若き主人に燒酒を買ひ來らしめ、豚の肉を携へし鍋に煮て、同宿の某が擠せる醬油エキスもて鹽梅するに、彼の朝鮮食物の爲に荒(すさ)み果てし舌の上妙味云ふ可らず、吾等も始めより携へ來りたらばと今更に旅行には注意と云ふもの第一の必要なりと思ひぬ、醉漸く發して興愈々起り、若主人をして朝鮮の俗謠を唱はしむ、發聲細く清みて、打ふるひつゝ打ふるひつゝ、消えて行くやうなる調の、意は分かねども無量の愁情を帶び來つて、直ちに聽人の涙を揮はしむ、

十一日 午前五時半、殘月を踏んで出づ、一里許にして中和を過ぐ、此處は去歲騎兵の古戰場也、人口畧黃山と同じ吾兵站部あり、吾軍の後列の輜重車に蹤いて行く、輜重は多く補充兵也、出發甚だ急なりし爲、被服等不整頓を極む、

兵の患者にして歩行に耐ふるを二等負傷兵と云ふ、吾會ひたる一人は昨宵民屋の破れ戸の倒れし上を踏みて、古釘を三寸ばかり、靴と共に貫きしが、大行李のさき立ちたる爲、己むなく七貫目の背嚢を負ひて足を曳きつゝ行くなりと云ひぬ、

今日も廣濶なる田畝を歩む事三里余り、足も疲れ氣も弛みたる時、なだらに小高き畑地の上に立ちて、ふと前方を見れば、覺えず驚喜の歡聲唇を破りて高く發しぬ、はるかに大河の白き布を敷くを見る其西岸に、山に倚り野を控へて、夥しき人家の甍よ、即ち是れ日毎に思ひ夜毎に夢みし平壤の市街也、

無きが如くにして有るは朝鮮の火鉢の火、近く見えて遠きは朝鮮の市街、疲れし脚を小走りに、例の善政不忘の碑の起伏せる間を通るに、此處

彼處土壘の圓形をなせるが、松樹の裡に隱見するに二十七八年の役吾軍の倚りしもの、坂を下りて柳の道を行き盡せば、一川あり一橋かゝる、石もて組みて三つの穹隆を高々と作りなせる、古木の柳の五六株其邊りに立てる、從來多く見ざるの風致なり、道の傍に二つの碑ありて、一つには永濟橋と彫り一つには

萬曆二十年壬辰六月倭賊陷箕城癸巳正月討賊復城此橋亦壞□修午二月始其役五月二日功訖

とあり其所謂倭賊が、三百年後二度も此里の地を踏まむとは、當時誰れ人か念い得んや、漸くにして大同江の岸に出でぬ、氷の碎けたるが亂積するを見れば、厚さ二尺にも余るべし、軍用橋とある其下流の氷の、早や溶け初めて足下にあやしき響あるを渡りて、安堵と疲勞と共に來りし

身の、大同門下に立ちしは午後三時なりけり、吾行此に小段落を告げぬ多謝す吾、双脚、つぎ〳〵に來るさま〳〵の感に打たれし吾頭を載せ、疲れながらも韓里六百里十一日の旅を了りし事を。

朝鮮日記の三

一　平壤記

大同門は吾見たる樓門中の尤も雄大なるもの也、京城南大門の如く直ちに正面に人を迎へず、門の直下両翼の石壁めぐつて別に一圈をなし人は其左の穹隆より出入する事東大門と同ど、折節雪解の路上三軍の人馬が足に攪されて、冷氷の如き泥濘草鞋に徹して久しく立つ可らず、門を入つて幾何ならず路の右に建てる吾領事館に詣つて、先發の同業三人が假寓を知り得ぬ、細き汚き路次を經て灘波館に到れば、何某聯隊長宿舍副官宿舍など張り札せし室々の、かねに曲りし横手に、女中が指す入口の戸の上、大坂朝日新聞記者宿舍、大坂毎日新聞記者宿舍、大坂新

報記者宿舍と、見覺へある右上りの筆法、聞覺へある聲と彼方より開ける扉の中に見ゆるは居るは、ヲヽ高橋よ、ヘ村よ、小杉か石川か、ヲヽ小田垣か、至情胸奥より出でゝ、困苦多かりし旅の前者後者が、伴を得たる喜は限りなかりき、

先づ草鞋を解いて一風呂と急げば、生憎や今日は焚かぬ日と云ふ、凡そ宿屋について風呂のなきほど不快なるはなけれども、此地水少く皆遠く人夫をして大同江より擔ひ上げしむる程ときけば、恕すべし恕す可しと、友に會ひし嬉しさに例の痞癖も起さず、肌の粟だつを忍びて金だらひの一掬ひばかりなる湯に身を拭ひ終りつ、

三十六根の齒牙と一枚の舌は、物珍らしき日本料理を味ふと、なつかしかりし同人等と語ると、両様の任に忙がはしく、一箸一語、一杯一笑、實に

船の着きたると草鞋を脱ぎたるは、過ぎ來りし路程の辛かりし度に從つて愉樂の多きを加ふるものかな、況んや先發の人々も同ド道を歩み同ド驛に宿り、同ド冷たき夢を結びたるに於てをや、

平山にてはかくありし、金川にてはしかありし、議合はずして星軒と十輪が前進せしあと、琴花は踪を失したる人夫を尋ね詫びて、三里あまりを往來亂走し、岐路に迷ひての果ては小高き丘の上に坐禪したり、肥滿したる十輪は長途の行に耐へず馬を賃して乘りけるが、人夫の不注意より両人と相失したるを憤りて、白刃もて威赫したる復仇、まざ〳〵と見たやうな山賊横行の詐りに、折ふし降りしきる雪の中を、ピストルの曳金に懸けづめの指、四里が間に手袋石の如く凍り固まりて、ピストルは宛然母の胎内より持つて出でたる如く離れざりし其夜、星軒は一人

運よくも兵站部の一員に知る人ありて、饗されし酒に亂醉し、仁川海戰の前夜未醒と共に暗中小舟の櫓を推して高千穗艦に到りし物語りに氣を吐く頃は、あだかも琴花が雪中を走る事十里許、午と夕と幷びに一粒の米をも食はねば、流石の健脚も弱りて十歩に息み二十歩に倒れ、倒るゝ毎にしばしの餓を凌ぐ可く地上の雪の握み喰ひ、漸く火影を見的にたどり着きし時なりし、などさま〳〵の物語りは、興と共に盡く可くもあらず、

十二日、朝、我れにも翼生へて、鳴きかはしつゝ長天に連り飛ぶと見し夢の覺めたるに尙家を回りて雁の聲あるを星軒子に問へば彼の大同江より、韓人夫をして水を運ばしむる、擔具の軋(きし)る音なりと云ふ、司令部より命ありて、內外諸新聞記者は、平壤以北に進む事を禁ずとあるに、相

顧みては呟きながら、吾も人も旅の疲れに意氣半ば沮み居りしかば好し去らば暫くは休養せむなど語り合ひぬ、蓋し此時已に琴花子は、彼の餓えて雪を咬みし腸胃の余毒に臥せし枕漸く離れしばかり、吾は前日身を拭ひし折、染みたる寒氣風邪となつて今朝は頭重く、星軒子亦顏色常ならず、春湖子は足の痛み未だ癒えず、健なるは獨り十輪子のみ、身に重きを負はず、嚴重なる軍規にも律されざりし吾輩がかくの如くなれば懸軍長驅して來りし、十二師團の兵卒に病めるもの多しと云ふは理(ことわり)なり、

十三日、昨日熱を推して城壁の下に、五人紀念の寫眞を撮せし爲にか、頭重く呟出でゝ、病み臥ししは吾のみならず、星軒子春湖子も又同ト、去れど多少の艱苦を經てわざ〳〵此地に來りしは吾職責の爲也、向鉢卷

に熱き額を緊めて筆を執りぬ、

十四日、召されて司令部に行きし、吾黨の假の代理、十輪先生は、半面の怒氣半面の苦笑を齎して歸りぬ、曰く、大本營急電あり、軍機上吾々の一刻も此地に留る事を許さずと、相顧みて言なし、他の通信員に先ちて、あまり厚からぬ待遇をサーベル黨に受けながら、勞と餓とを忍びて此處まで來りしは何の爲ぞ、胸中互に多少の怨聲を感せざるには非れども軍令凜として犯す可らず、抵抗の極點は三十年式の一發のみまた何をか云はむ云ふ可らじ、

去れど星軒子の發熱と咳とは又輕からぬ容態を示し來りたり、吾れも亦行李中の解熱劑と親しむ、鎭南浦に航路は通じぬと聞けど、尙十五里は陸を行かざる可らず、途上に倒るゝは寒心すべき事也、さるほどに十

輪子再び往きて、漸く一日の猶豫を乞ひ得たり、

十五日　星軒氏が病舊の如し、蓋し此地の風土病として來者多くは一たび呼吸器を犯されざるなしと云ふ、況んや六十里の行程、夜は彼の溫突の寧ろ熱きに過ぐるに宿り、曉に忽ち寒風馬尾も凍るばかりの外氣に中る、袖の裡に醫師の鑵詰めを携へたりとも容易に其の咽喉を衛る可らじ、

十二師團長の宿舍此家に轉じたれば、吾々は兎も角も分宿せし二室の內の一室を明け渡さゞる可らず早朝行李を收めて、星軒子のみを殘し置き、四人共に知人安井氏が御用商人として來り、前議官金龜喜が家に寓せるに食客となる、相議して云ひけるは、病人一人殘して去らむと憂ふ可き事ならずや、司令部が我を追ふは通信に依りて軍機の洩れん事

を恐れての故なれば、通信さへせずば二三日の滯留何かある可き、個人の自由は憲法の保障あるにあらずやと

十輪子一日の長を以て吾爲に城中巡覽の嚮導となる

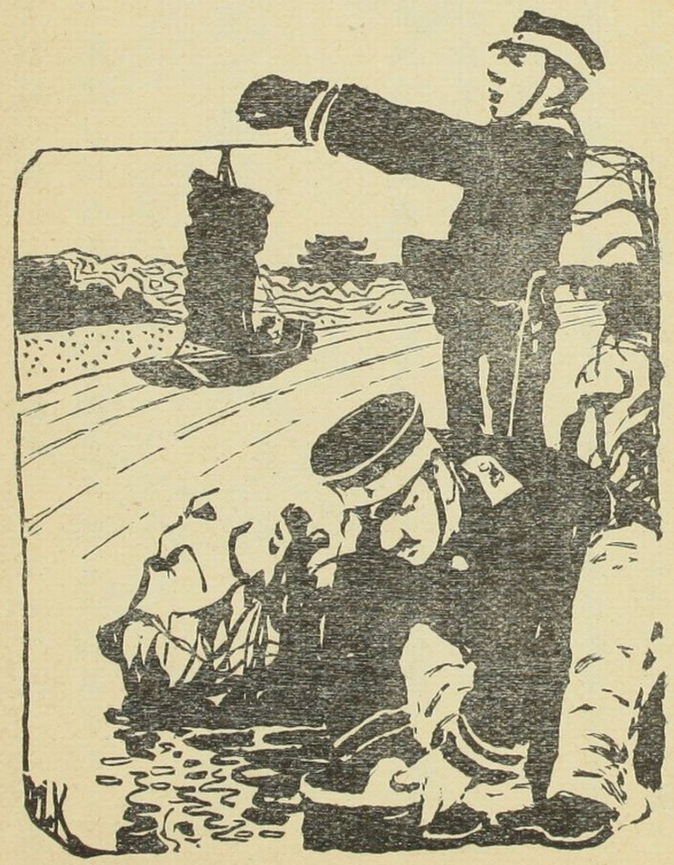
三百年前小西行長が守りし處、十年前野津中將が攻めし處、平壤の名は朝鮮中尤も邦人の耳に熟せる也、清の勇將左寶貴が戰死のあと、乙密台は松の風、城壁の破れたるを土石材木にて假りに繕ひたるは去日吾軍未だ達せず、露軍南下の報頻りに人心を驚かすに居留民中の男兒五十人相結んで劍と銃とを把りて起ちたる、其折の防禦工事と云ふ、台上に立ちて眸を放てば、大同江の氷處々溶けて、漁舟二三懸崖に打つたる鐵鐶に繫ぎあり、その懸崖と江流との間、細路羊腸として水に從ひ岩を縫へるは、是れ遠く元山津に至る道ならずや、江中に島あり、田園開けて村落二三、遙かに雞犬の聲を聞く、兵馬到らず戰塵絶たば、小天地、定めて悠々怡樂の事多かる可し、

牡丹臺は當城第一の要害、劍を植へて行長が死戰したりと云ふ、頂には黃帽の兵嚴然と立つて北の方義州街道を監視す、觀月亭は今も尙昔の如し、滿肚の豪興を酒氣に吹きし行長は何處ぞ、抔中の淸影を惜みて一曲の樂に耳を傾けし左寶貴は何處ぞ、原田重吉が玄武門今尙彈丸の痕やある、七星門は日露の陸兵が最初の戰場たり、一々の詩味、一々の畫題、時なり處也、我に半日の閑あらば、行李の底には若干の家苞苴も增すらむを、

病軀長く立つに耐えず、家に歸れば領事新庄急に吾黨を召すと云ふ、此度吾勉めて行く、要するに司令部の嚴命を傳達して今夜にも出立す可

しと云ふに過ぎず、吾さへ辛きに星軒子を奈何にせんと思ひて行きて告ぐれば元來の勝ち氣者、枕を擊つて好矣共に去らんのみ、と云ふ顏の色の蒼然たるも物詫びし、再び諸氏と謀るに、憲法の保障も例の三十年式には無効也、星軒子が身に事なくんば、明朝馬にて程に就く可しと云ふ、議決しぬ、平壤も是を限りと思ひければ病を推して街上を漫歩す、此地二階建ての家多し、此國にしては他に見ざる處、當年行長が遺し行きしが基となりしと云ふ、十二師團の兵は何處にも滿ち充ちたり、一コップ二十錢の酒屋にも、一箇五錢の牡丹餅屋にも、一浴八錢の湯屋にも、一頭六十錢の散髮屋にも、推し合ひへし合ひて黑山の如し、奇利を博せんとして辛苦して來りし、吾小野心家の財布は重かるべし、欲極千里眼、更上一層樓、石階を蹈んで大同門上に登れば、今し夕やけの

雲際、城壁と其上に突出たる建物の家根との輪廓畫然として、上は赤下紫の染模樣、斜に浮んで横さまに消ゆるは炊ぎの青き煙也、江に臨めば暮靄淡き處渡し舟過ぎ行くあとの水の色おぼつかなげに軍馬の



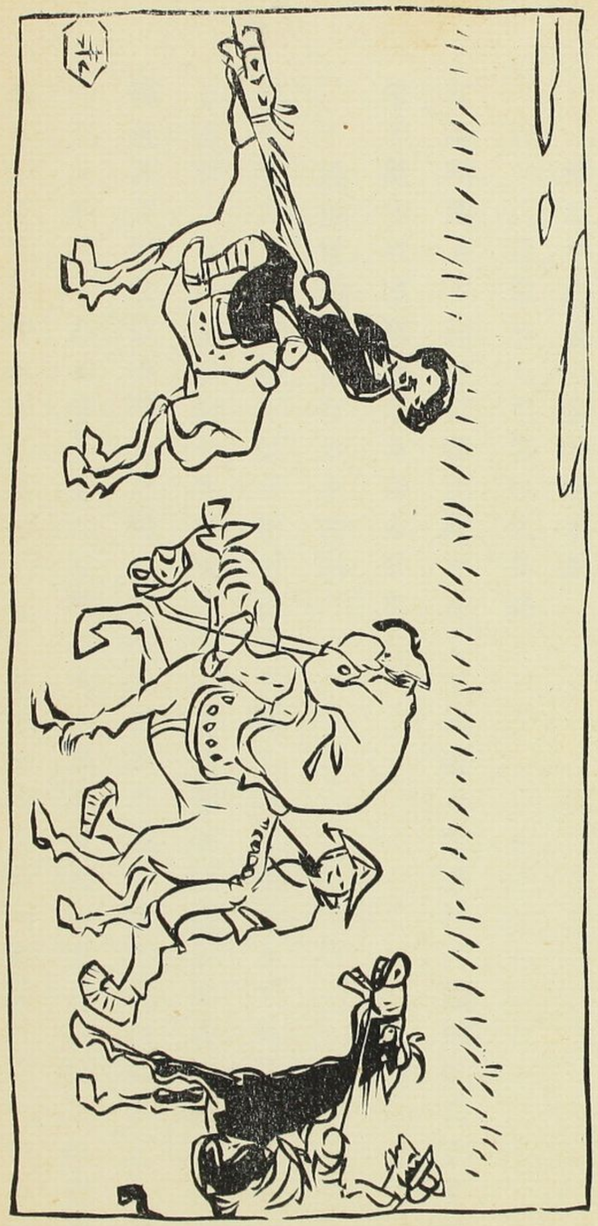
嘶き物悲しく冷たき城壁に響いて、枯蓬に踞するは誰ぞや、兵士か、後姿のうらさびしき、夕の風吹けば吾衣寒く吾頭重し、明日の旅路よ、あゝ、

二　平壤を追はるゝの記

大本營の命に曰く、

平壤附近にある内外國の新聞通信員は大本營より配屬の許可を受けたるものに非ざれば吾軍の行動に關する通信を一切禁ず可し此の通信員は仁川京城附近に退却せしむ可し、

十六日　の曉、庭に韓馬の嘶きに目さめて朝飯を喰ふにも暇なく出立す、鞍の両側に行李を着けて背に跨れば倒れそうなるまでに少き馬な



から、力は却つて日本の駄馬にも勝る可し、馬士各一人、平壌を離れたり、

瘠馬や追放の客の繩手綱
草白うして雲に入る路、

五馬相連りて行けば凍雲陰々として風凄々、吟ずれば悲歌ならざるはなく、默すれば愁思ならざるはなし、

故里は梅の春なるを朝氷

行く事二里許、顧みれば星軒子在らず、蓋し人は病ありて馬は疲後れたる也、朝より一箸の飯をも喰はざりしかば皆甚だ饑えたるに、村の僮の箱捉げて、餡を賣り來るを認めて、爭ひ買ふて飽くまで食ひぬ、空しき胃の裡にねばりある甘きものゝ、頓に入りたるに如何なる醫學上の說明ありやなしや知らず、しばらくして皆異樣なる痛みを覺へて、おかしか

らぬ顔の色いよ〳〵むづかしうなして一小驛に馬を下り、飯の用意など命ずる頃、星軒子も來りぬ

きび焚くや馬槽の氷破る音

甚だしき惡路なれば、馬に馴れざる我は屢々落るに、馬低く吾脚長ければ、横さまにも倒れず四つ匐ひにもならず、追々に巧みになりて、馬背より滑り下るは未醒第一の余り芳しからぬ名を得つ、春湖子も亦三度ばかり轉落の憂目に會ひたるやうなり、最も武者振り好きは琴花子、軍團長の名あり、星軒子常に後る、後方勤務の稱あり、

吾勞より人の逸を見れば快からぬものと見なして、鎮南浦より上陸したる近二両師團の歩兵の爲に、故なき喝令を蒙りたる事屢々なりき、下馬緩怠の昔と思へば腹も立たず、例の滑り下りの妙術はかゝる時也、呟きて曰く、容し給へ諸君、我々は歩に耐へぬ後送患者也、

さる山あひを通りし時、赤帽の工兵二ヶ中隊ばかりと行合ひしが其内に故郷竹馬の友の交り居て、互に見合ひながら一聲ばかりはかけたれども、行軍の規律に詮方なく見送りし、吾若し抽籤に當りたらば今年現役の三年兵として、亦此内に在らなんを、あはれ君故郷に母もあり姉もあり、君夫れ歸るや歸らざるや、

近衛騎兵一箇聯隊來る、野を貫き山に動いて、蜿蜒として錦鱗の長蛇の如し、十二師團のは長途の行軍に疲れて、兵威少しく揚らざりしが、こは新來の鋭氣、各々眉庇しの方二つの眼に現れてたのもしげ也、暮れてなにがし驛に入る、此夜十輪子恙あり、大に呻吟の聲を發す、

十七日　今日は鎮南浦に至る可ればとて各人生氣を復し來りぬ、吾腰

間のピストル、幸に一發の烟も放たざりしかば行人の絶ゑたる折、試みに曳金をひきて見るに、曳けども曳けども音もなし、かゝるものを恃むはよからぬ事なれども、已に身につけたる上はよく檢し置くこそよけれ、目釘脱けて思はぬ不覺を取りし例しもあるものをと、星軒子の爲に笑はる、

一小流の堤の上を行くに、狹まくして馬と馬との行き違ひには、中々に困難を覺ふるに、彼方より來りし韓人の駄馬の荷の、不注意より吾馬の鞍に觸れしかば、さらでも重荷に疲れたる蹄に力なく、たぢ〳〵となりて後脚は已に堤の上を離れ、我は危く十尺下の波に洗はれんとしける を、辛うじて鞍に縋りて免れぬ、面白からぬ旅路に怒り易くなれる吾胸は、此時勃然と激して已れ馬子の頭、鐵拳の味示さんと滑の滑り下りの妙術、情なや寒氣に脚かゞまりて敢なくも倒れ伏し、やう〳〵起き上る苦笑はいたづらに韓人の冷笑を買ひ得たりぬ、日未だ高きに鎮南浦に入る、滿街皆兵、一夕の夢の置き場も覺束なきに、五人自惚れて曰く、共に行きて領事君に乞はゞ何とかなる可しと、日章旗の立てるを見當てに、門前に馬を下りて刺を通ずれば、領事某髯美しく言冷かなり、越中褌向ふより外れて、去つて街上を彷徨ふに、左の窓より呼ぶものあり、嘗つて東鄕少佐に從つて有力なる敵狀偵察に努めたる渡邊氏及び服部氏なり、家は白川氏が有、主人今在らねども、吾等が爲に一夜の宿を許すと云ふ、嘆じて曰く渡る世間に鬼はなしと、

しかも男世帶の人々に、煩はしき思させん事を憂ひて、五人去つて某料理店に到り、宿舍せる兵卒の歸るまでなる條件を以て辛くして晩餐を

了りぬ、酒少々鷄肉少々、勘定十五圓なにがし、思ふに此家の主人、戰爭了る頃は居留地一の身代となる可し、

宿はあれども蒲團なし、奥の間の疊の上火なき火鉢を怨めしげに眺めながら、毛布に纏はれて横はる、風寒く夢なりがたく頭重し、頼むは三服のアンチヘブリンのみ、

十八日、議合はず、春湖氏と琴花子は明日の御用船に便乘せんと云ひ、他の三人は今日の蒼龍號にて去らんと決す、近衛師團には吾兄あり、定めて此邊に舍營し居るなる可しと思ふに、異鄕骨肉の情、油然として湧いて禁じ得ず、朝より午に至る迄、尋ねめぐれども遂に會はず、弟は歸り兄は往く、往く處は戰場なり、同じ地を踏みながら面相見るを得ざるこそ悲しけれ、

枝川の別れ別れに涸るゝかな

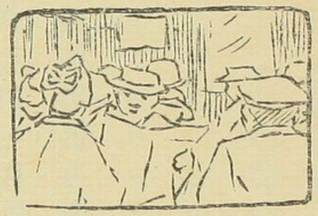
午後三時、滊船に乘らむとして棧橋に到る、近衛師團長の上陸に遇ふ、參謀官等が中に交りて騎兵少尉の服何となく氣高きが、見覺へあるに傍人に問へば北白川宮恒久王殿下と云ふ、

むかし殿下吾鄕に遊び給ひし時、吾家の池廣うして小舟の面白きを愛で給ひ、屢々駕を枉げられしが、吾常にそが舟手の任を承りき、日月迅矣、人事變矣、其折十一二と見奉りし殿下は已に早く軍旅の中に高貴の御身を勞し給ふ程に成人せさせ給ひぬるよ、十四五なりし我、亦異境の土を觀戰の任に踏んで、五百里の北再び外ながら勇ましき御姿を見まゐらせし事、歸つて是を故山の老親に告げなばいかばかり喜ぶ可き、吾家は日光御神領の住民たり、蓋し輪王寺法親王はそのいにしえの君主也、

鎭南浦は大同江の河口也、平壤を京城とすれば是は當に仁川なるべし、良港なれど冬期の結氷は大いなる發達の障害をなすと云ふ、此處も亦韓人は遠く去つて吾居留民のみ街の要地を占む、宿屋二三軒、奇生虫たる賣色の徒も已に其種十二三は播かれぬとか、港左に島あり、松樹鬱々、吾公園地となす、蒼龍號の甲板に立ちて望めば、洋々たる大江の水は、二間三間大の氷塊を限りなく流し來りて、艀舟の櫓手大に艱む、御用船の煤煙をあげて來るもの悉く吾兵を滿載せざるはなく、其氷塊の多きよりも多かる可し、流氷海に入らば悉く溶けむ、吾兵北に進んで、亡ふ處希くは多からざれ、船は出でぬ、天暮れむとす、積氷茫々として矚目際涯なし、

十九日、風吹き立ちて波荒れそむる頃、仁川港に着きぬ、あとの二人が船路を艱しからんなど想ひやり語り合ひつゝ、例のサンパンに運ばれて久しぶりに大草旅館樓上の人となりつ、自ら勞を犒ふ酒の味も熱ある舌には苦きを厭ひ、肱枕のうと〳〵としたる時刺を通ずるものあり、驚喜して立つて迎ふは何ぞ、曰く、從軍記者となつて長崎の豪傑新聞より來る、竹馬の友の目玉の池田、敬ちやんにはあらざるや、

朝鮮日記 終



明治三十七年十一月五日印刷
同　三十七年十一月八日發行

定價金三十五錢

著者　小杉未醒

東京市日本橋區通二丁目十三番地
發行兼印刷者　小林慶

東京市日本橋區通二丁目十三番地
發行所　嵩山房

東京市日本橋區三代町二十二番地
印刷所　明昇舍

不許複製

（賣捌）
東京市　東亞堂　京都市　若林書店　大阪市　吉岡平助
名古屋市　川瀨代助　大阪市　前川前兵衛　熊本　長崎次郎

◎新刊圖書

文學士堀田璋左右君新著

受驗參考 日本歷史

美裝賣價金卅五錢
全一冊 郵稅金六錢

本書ハ歷史上ノ事實ヲ最新ノ方案ニヨリテ排列シ或ハ表ニシ或ハ系圖ニシ或ハ辭典ノ如クシ或ハ試驗問題ノ如クシ年代ヲ逐フテ編纂セルモノナリ

「少年世界」「博物雜誌」記者木村小舟君新著

採集の栞

圖畫多數 定價金三十錢
全一冊 郵稅金四錢

春夏秋冬ノ四季ニ分チ動植物ノ總テニ就テ其採集法ト製作法及ヒ分類法鑒別法ヲ著者得意ノ詩的文字ヲ以テ簡明ニ記述セルモノナリ左レバ學生諸君ノ野外運動ニ缺クベカラザルハ勿論博物ニ志アル諸士ノ必携スベキ寶典ナリ

八木奘三郎君著

考古の栞

圖畫多數
全一冊
上製金四十錢
並製金三十錢
郵税金六錢

遺物採集遺蹟探査ノ案内書トシテハ本書實ニ唯一ナリトス左レバ學生諸君ノ修學旅行ニ缺クベカラザルハ勿論歴史及ヒ古物研究ニ志アル諸君本書ヲ熟讀セバ土中發見物ハ勿論建造物、器物、裝飾物、書畫等ニ至ルマテ鑒識上啓發スル處尠ナカラザルベシ

坪井博士校同君著

增訂五版 日本考古學

圖畫百餘
全一冊
定價金一圓五十錢
郵送料金十五錢

渡邊國武君題字　黑岩涙香君序
萬朝報記者茅原華山君著

動中靜觀

全一冊
定價金四十錢
郵税金六錢

著者ノ隨筆五十篇ヲ集メタルモノ文字流暢ニシテ趣味多ク種々ナル題目ヲ捉ヘ來リテ巧ミニ舒シ去レリ

同記者伊藤銀月君撰著

百字文選

正續二冊
定價各金廿五錢
郵税各金四錢

文例數百篇ヲ擧ゲテ縱横論評シ且ツ其作法ヲ懇示セリ

白馬會研究所々員大槻鹿輔君著　中澤弘光岡野榮兩君畫　第三版

スケッチの栞

寫生法ニ關スル秘訣ヲ親切明快ニ舒述セルモノナリ苟モ繪畫ヲ學バントスルモノハ本書ニヨルベシ今ヤ喝采ノ裡ニ第三版ノ刷行成レリ

挿畫多數　全一冊　定價金三十錢　郵税金四錢

文學博士井上圓了先生書簡　萬朝報記者某氏抄譯

人生の快樂

本書ハ有名ナルらぽつく氏ノ「プレジュアオフライフ」ヲ抄譯セルモノナリ厭世的悲觀的ニ傾カントスル青年諸君本書ヲ熟讀セバ唯一塲ノ迷夢タルヲ悟ルヲ得ベシ

全一冊　定價金三十錢　郵税金六錢

商船學校教授馬場信倫君著▼増訂**氣象學**▲正價金貳圓二十五錢　郵税金十六錢

秋山蓮三君著▼**海の動物界**▲正價金四十五錢　郵税金六錢

秋山蓮三君著▼**哺乳動物**▲正價金六十錢　郵税金八錢

沼田頼輔君著▼**日本人種新論**▲正價金六十錢　郵税金八錢

鳥井龍藏君校　楠堂隱士著▼**人種の研究**▲正價金七十五錢　郵税金十錢

高橋法學博士校閲　落合森田兩君合著▼**亞細亞に於ける露西亞**▲正價六十五錢　郵税金八錢

東京美術學校教授
岩村透先生著

▼西洋美術史要 以太利繪畫部 ▲正價金八十五錢 郵稅金八錢

黑田、岩村、久米、小山、三宅、和田、外諸氏選

▼泰西名畫集 ▲第一輯金七圓 第二輯金六圓

禮節大家
石井泰次郎先生著

▼婚禮千代かゞみ ▲正價金六十錢 郵稅金八錢

石井泰次郎先生著

▼女子作法 紐結包物標本 ▲正價金壹圓半 郵稅金十錢

八木奘三郎君著

▼考古便覽 ▲正價金壹圓五十錢 郵稅金十四錢

白馬會編纂

▼美術講話 ▲正價金壹圓七十五錢 郵稅金十錢

1
50
1
48